

人文学の先端をめざす

名古屋大学文学部
大学院人文学研究科案内
2027

School of Humanities /
Graduate School of Humanities 2026,
NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学文学部
大学院人文学研究科案内 2027



<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/>



このパンフレットは、
植物油インキを使用しています。

文学部の アドミッション・ポリシー

人文学分野の研究に取り組むのに必要な基礎的な学力を備え、人間の営為としての言語・文化・歴史に深い関心を持ち、社会・環境など現代社会が抱える諸問題を考えることに意欲がある人を入学者として選抜します。

人文学研究科の アドミッション・ポリシー

人文学の研究を通して世界の諸課題に取り組む強い意欲を持ち、研究に必要とされる専門知識と言語能力を備えていて、研究対象を論理的、実証的に考察し、その成果を的確に論述できる能力をもつ人を入学者として選抜します。

名古屋大学文学部 大学院人文学研究科への招待

文学部・人文学研究科とは、過去から現在へ、そして未来へと続く人間と社会で産み出された、有形無形のかげがえのない知の遺産について考察し、人間性(人間が人間であること)の本質に迫ることを目的とする学部・大学院研究科です。文学部の「文」とは「人文」と同様、創造的な存在である人間のあらゆる表現活動と、その所産を包摂する幅広い概念です。世界の人々の多様な言葉や生活様式、思いがけない思考回路、それぞれの歴史、各地域で育まれた思想や芸術や物質文化、それらが時として破壊・禁止され、復活したプロセスなど、人間に関わる事のすべてが文学部・人文学研究科の教育研究活動の対象となっています。

この目的の達成に向けて、文学部・人文学研究科には6つの学繋を設置されており、各々「人間性の本質に迫る」という共通のゴールに向かう異なるアプローチを示しています。学繋の下30の分野・専門は教育研究の基礎単位で、大学2年生に進級する際、また大学院では受験する際に、これらの中から所属先を選びます。ただし、所

属する分野・専門だけではなく、同学繋の他分野・専門、さらに他学繋の授業も受けられ、少人数教育のアットホームな雰囲気の中で、上級生や下級生も一緒に、幅広い学びを重ねていくことができるのが、文学部・人文学研究科の特色です。

「文」「人文」といえば、“本の虫”の様なイメージがあるかもしれませんが。時代は変わり、言語や歴史文化への深い探究心と社会・環境への強い関心に基づいて、膨大な文献や資料をアクティブに収集・分析し、異なる意見にも耳を傾けつつ、自ら研究テーマを発見し設定する力、それはまさしく、現代社会が直面する予測不可能な諸問題に対応できる能力です。

高校の教科書で学ぶことの多くは、実は流動的で新資料や解釈によって変わり得ます。また、学部で探求した課題のその先に、さらに追求したい魅力的な対象を発見する人もいるでしょう。名古屋大学文学部・人文学研究科で、皆さんのそうした驚きと感動を共にすることを楽しみにしています。



文学部長・人文学研究科長
星野 幸代

CONTENTS

文学部・人文学研究科長あいさつ
名古屋大学文学部 大学院人文学研究科への招待

文学部について	02
人文学研究科について	03
学繋について	04
I. 言語文化学繋	05
言語学	06
日本語学	07
日本語教育学	08
II. 英語文化学繋	09
英語学	10
英米文学	11
英語教育学	12
III. 文献思想学繋	13
ドイツ語ドイツ文学	14
ドイツ語圏文化学	15
フランス語フランス文学	16
日本文学	17
中国語中国文学	18
哲学	19
西洋古典学	20
中国哲学	21
インド哲学	22
IV. 超域人文学繋	23
映像学	24
日本文化学	25
文化動態学	26
ジェンダー学	27
メディア文化社会論	28
ダイバーシティ論	29
V. 歴史文化学繋	30
日本史学	31
東洋史学	32
西洋史学	33
美学美術史学	34
考古学	35
文化人類学	36
文化遺産学	37
VI. 環境行動学繋	38
社会学	39
心理学	40
地理学	41
VII. 所属先としての コースやプログラム	42
英語高度専門職業人コース	43
言語学・文化研究プログラム	44
「アジアの中の日本文化」プログラム	45
VIII. オプションとしての コースやプログラム	46
特別コース(3つのコース)	47
学芸員養成課程	48
コチュテルプログラム	49
IX. センターや 学繋共通教員など	50
人類文化遺産テキスト学研究センター	51
超域文化社会センター	52
人文知共創センター	53
共通 各学繋の共通教員	54
助教	55
国際化推進室	56
X. 国際交流	57
国際学術交流	58
留学のすすめ	59
XI. 先輩からのメッセージ	60
学部在学生・卒業生からのメッセージ	61
大学院在学生・修了生からのメッセージ	62
XII. 社会へ	63
文学部	64
大学院	65
XIII. 入学と勉強のために	66
文学部	67
大学院	68

教員詳細については、下記のアドレスまたは、QRコードで
人文学研究科文学部教員紹介を検索してください。
<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/teacher/teacher-sub1/>



文学部について

文学部の概要

名古屋大学は、9学部、13大学院研究科、3附置研究所、および数多くの共同教育研究施設からなっています。その中で、文学部は人文学系の学問分野を担う部局として、昭和23年度に設立され、75周年を迎えました。名古屋大学は、「自由闊達」を校風としていますが、文学部は

文学部が養成する人材像

文学部では、言語・文化・歴史に対する深い探究心と社会・環境への強い関心を持ち、高い異文化理解力を備えた人材、また、人文学的教養を通して、国際社会・地域社会の諸問題の解決に寄与しうる人材、そして、「高い異文化理解能力と言語運用能力」、「文献や資料を収集・読解・分析する能力」、「専門分野における基本的な研究方法を理解し、応用する力」、「論旨の一貫した文章構成能力とプレゼンテーション力」、

文学部の学繋／分野・専門

文学部では、学問の多様性を反映して、固有の学問領域からなる22の分野・専門がありますが、これらを横断的・体系的に学んでいくため

文学部における学び

名古屋大学に入学すると、1・2年次は国際化社会に対応するための外国語科目や、文系・理系の基礎的な力や幅広い教養を身につけるための科目などからなる全学教育科目を中心に履修します。一方、文学部独自の科目として「人文学入門」が1年次向けに開講されており、これにより、文学部にどのような学問領域があるのかを理解することができます。これを踏まえて、2年次になって、いずれかの分野・専門に分類して、当該分野の基礎的な力を身につけていきます。そして3年次以降、本格的な専門科目に取り組んでいくことになります。

専門科目には、各分野・専門固有の科目がありますが、学問領域を

その中でもとりわけ多様な学問領域を有し、自由で先端的な研究を展開しています。文学部では、こうした研究成果を踏まえ、少人数教育に重点を置き、きめの細かい教育を行っていることが特色です。

「現代社会が直面する諸問題に専門分野の知見に基づき対応できる能力」を備えた人材を育成します。

一方、学問は多様性が大切です。各学問領域には固有の目標があります。人文学には多くの学問領域がありますので、それぞれの分野で目指すところを見据えて努力することと合わせて、全体を俯瞰する複合的な視点も求められます。

に、分野・専門を6つの学繋に編成しています(3ページ表1を参照)。

超えた共通科目もあります。この両者により、専門領域を深めていくとともに、いわゆるタコツボに陥らないよう、幅広い視野から専門の学問をとらえ直すことができるようになります。

専門科目は、大きく分けて講義系科目と演習系科目からなっています。これらの科目を履修することを通じて、研究の根拠となる資料を分析し、先行研究を批判的に読み解き、論理的に議論を展開して結論を導くための訓練を積んでいきます。その集大成となるのが卒業論文です。卒業論文では、自ら課題を発見し、これを解決して研究成果としてまとめることが求められます(2ページ図1を参照)。

図1 | コースツリー

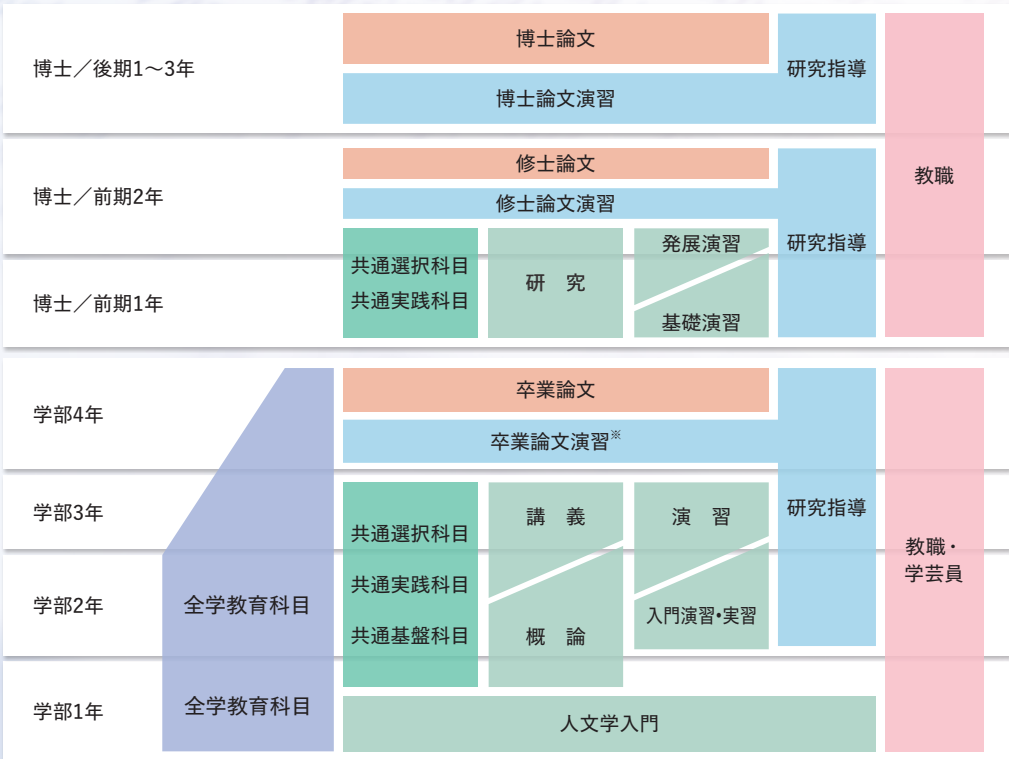


表1 | 学繋／教育プログラム／分野・専門

学繋	教育プログラム	分野・専門(文学部)	分野・専門(大学院人文学研究科)
言語文化	言語学	言語学	言語学
	日本語学	日本語学	日本語学・日本語教育学・応用日本語学
英語文化	英語文化学	英語学・英米文学	英語学・英米文学・英語教育学
文献思想	西洋文献学	ドイツ語ドイツ文学・ドイツ語圏文化学・フランス語フランス文学	
	東洋文献学	日本文学・中国語中国文学	
	哲学倫理学	哲学・西洋古典学・中国哲学・インド哲学	
超域人文	超域人文学		映像学・日本文化学・文化動態学・ジェンダー学・メディア文化社会論・ダイバーシティ論
歴史文化	歴史文化学	日本史学・東洋史学・西洋史学・美学美術史学・考古学・文化人類学・文化遺産学(大学院のみ)	
環境行動	環境行動学	社会学・心理学・地理学	(環境学研究科・情報学研究科)

人文学研究科について

人文学研究科の概要

人文学研究科は、昭和24年度設立の文学研究科、平成5年度設立の国際開発研究科国際コミュニケーション専攻、平成10年度設立の国際言語文化研究科という、人文学を担う2部局1専攻を再編統合して、平成29年度に設立されました。人文学研究科では、人文諸学に関する深い学識と幅広い理解を基盤とし、日本及び世界で活躍できる研究者・高度専門職業人、及び、高い言語能力と優れた異文化理解力を兼ね備え、国際社会及び地域社会の諸問題に対応できる人材、そして、

教育の特色

人文学研究科の教育面での特色は、6つの学繋、9つの教育プログラムに基づいて、29の多様な分野・専門を編成し、学位取得までの体系的な教育プログラムを構成したことです(3ページ表1を参照)。分野・専門の専門的科目により個々の学問領域を深く究めると同時に、学繋ごと、教育プログラムごとに分野横断的な科目を履修することにより、俯瞰的な視座を身につけることができます(2ページ図1を参照)。

研究の特色

本研究科の研究面での特色は、①「テキスト学の世界的研究拠点」②「言語学分野の結集」③「アジアとの研究交流拠点」の3点に整理できます。①については、旧文学研究科において採択された、21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」、グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」の成果を継承し、新研究科においても附属センターとして人類文化遺産テキスト学研究センターを設け、これを拠点に研究を推進しています。②については、再編により言語学・応用言語学分野の研究者が1組織に結集したことを基盤とし、

「専門分野の研究方法に基づき、文献や資料を収集・分析し、そこから必要な情報を抽出し研究に活用する能力」、「自ら課題を発見し、研究のテーマを設定する力」、「確かな論理的思考力と豊かな文章表現力とプレゼンテーション力」、「国際的に活躍できる高い異文化理解能力と言語運用能力」、「現代社会が直面する諸問題に専門分野の知見に基づき対応できる能力」、「社会に人文学の叡智を還元できる能力」を備えた人材を育成します。

もう一つの特色は、教育を通じて社会貢献を図っていることです。英語高度専門職業人学位プログラムでは、中学校・高等学校の英語教員のリカレント教育を行います。また、文化資源学など、フィールドワーク関係の授業を充実させ、高度な能力を持った学芸員などを養成し、地域文化の価値を再発見し、これを幅広く発信できる人材を育成します。

同分野における先端的、共創的、国際的共同研究を推進することを目指しています。③については、旧文学研究科での取り組みを継承し、「アジアの中の日本文化」研究センターおよびこれを発展的に改組した超域文化社会センターを拠点として推進するものです。また、旧文学研究科で「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択された「人文学フィールドワーカー養成プログラム」の成果を継承し、フィールドワークに基づく分野横断的研究を推進していることも特色です。

国際化への対応

文学部・人文学研究科は、留学生が多い点も特徴です。留学生との交流の中で国際理解の最初の第一歩としての経験を得ることができます。また、英語力強化にも取り組んでおり、これを踏まえて海外留学を積極的に促しています。

さて、名古屋大学では国際化への取り組みの一環として、英語で行われる授業だけを履修することで学位を取得できる教育プログラム

であるグローバル30国際プログラム群(G30)を設けています。これに沿って、文学部では「アジアの中の日本文化」プログラムが、人文学研究科ではこれに接続する同名のプログラムと、言語学・文化研究プログラムがあります。これらのプログラムに出願できるのは外国人留学生および帰国子女に限られますが、一般の学生もこのプログラムの授業を受講することができますので、積極的に活用して欲しいと思います。

学生ひとりひとりの 個性を伸ばす少人数教育

文学部・人文学研究科は2022年度から教員組織および教育プログラムを刷新し、これまでどおりの専門分野への深い学びに加え、隣接する学問分野や文理融合研究、社会との関わりなど、人文系の学問を社会に活かすためのより広い学びをおこなえるようになりました。

学部・大学院あわせて6つの学繫に32の分野・専門（研究室）が配されており、学生は各分野・専門に所属しつつ、その指定する教育プログラムに基づいて履修をおこないます。文学部・人文学研究科で教育に携わる教員は100人を超えており、学生ひとりひとりの学修にきめ細かく対応できるのが大きな特徴です。

言語文化学繫

▶P.05

日本語をはじめとした多様な言語に関して本質的な理解と教育等への応用のための多様な方法を学ぶとともに、その緻密な分析を通じて、現代社会の諸々の課題の解決に貢献できる力と、高い言語能力、異文化理解力を、地域および国内外の学術交流の中で養います。

言語学 日本語学 日本語教育学 応用日本語学

英語文化学繫

▶P.09

英語という言語、および英語圏の文学を実証的・理論的に分析することを通じて、言語活動を含む人間の精神的営みの本質を追究し、涵養された言語能力と論理的思考力をもって、英語に関わる研究職、教育職、高度専門職を担いうる人材を養成することを目標とします。

英語学 英米文学 英語教育学

文献思想学繫

▶P.12

世界の在り方や人間の営みをテキストにもとづいて分析する手法を学び、理解をより深めて、これを人生に生かし現代社会が直面する諸問題に対応できる能力を養うことを目指します。

ドイツ語ドイツ文学 ドイツ語圏文化学 フランス語フランス文学 日本文学
中国語中国文学 哲学 西洋古典学 中国哲学 インド哲学

超域人文学繫

▶P.21

映像、表象文化、メディア文化、移民・マイノリティ、ジェンダー、東アジアと日本の文化など学際的な問題について自ら課題を発見し、多角的なアプローチによる対象となる資料、テキスト、データの分析に基づいて、これを解明する能力を、地域及び国内外の学術交流の中で養います。

映像学 日本文化学 文化動態学 ジェンダー学 メディア文化社会論 ダイバーシティ論

歴史文化学繫

▶P.27

様々な時空間における人間の歴史的・文化的営みに関して、文献史料・美術作品・物質資料・民族誌資料等の分析とフィールドワークを通して、人間社会の成り立ちや文化的多様性を解明し、このことにより人間と社会に対する広い視野、異文化理解能力を養います。

日本史学 東洋史学 西洋史学 美学美術史学 考古学 文化人類学 文化遺産学

環境行動学繫

▶P.34

実験・観察・調査などの方法を用いて、人間の認知や行動の仕組み、人間社会の多様な実態を環境との関わりを視野に入れて実証的に探究し、人間に対する理解を深め、現代社会が直面する社会現象や社会問題に対応できる能力を養います。

社会学 心理学 地理学

Linguistics

言語学

学部

大学院

<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/about/about-sub2/linguistics.html>



人間は言語を使う動物であり、人間がこれまで築き上げてきた文明は、言語なしでは考えられません。ですから、言語がもっているしくみを知ることで、人間が自分を取り巻く世界をどのように認識し、どのような思考を形成しているのかを知ることができるわけです。その意味で言語学は人間を知るための最も基礎的な分野に属する学問です。

世界の言語は表面的にはそれぞれ異なっていますが、本質的には共通性をもっていると考えられます。言語学は、世界の諸言語を広く深く追求することによって、人間活動の基礎としての言語の本質的特徴を解明することを目標としています。



授業では、言語を分析するための基礎的な方法を学習します。そして同時に、それをできるだけ多様な言語に具体的に適用することによって、多様性の中に均質性が認められることを体験することにも力を入れています。そのためには、様々な言語に関心をもつことが大切です。教員スタッフは、日本語、朝鮮・韓国語、チュルク諸語、東南アジアの大陸部の諸言語等を専門としています。

担当教員紹介	大島 義和 教授	Ph.D. (Linguistics)
	意味論、日本語学	
	・“Semantic Variation in Exclusive Quantifiers: English <i>Only</i> , Japanese <i>Dake</i> , <i>Dake-wa</i> , and <i>Shika</i> , and the Cleft Construction” <i>Natural Language and Linguistic Theory</i> 41 (2023) ・“When (not) to Use the Japanese Particle <i>Wa</i> : Groundhood, Contrastive Topics, and Grammatical Functions”, <i>Language</i> 97 (2022)	
宇都木 昭 教授	博士(言語学)	
	音声学、音韻論、朝鮮・韓国語と日本語の諸方言	
	・“Individual Differences and Character-Based Challenges in Hangul Acquisition Among Korean Language Learners in Japan,” <i>Journal of Korean Language Education</i> 34(共著、2023) ・『朝鮮語ソウル方言の韻律構造とイントネーション』(勉誠出版、2013)	

博士論文

ベンガル語を母語とする日本語学習者におけるベンガル語と日本語の無声歯擦音の特徴／人称詞と指示詞の日韓対照研究／ディアスポラ方言としての在日コリアンの朝鮮語に関する社会言語学的研究－朝鮮学校コミュニティを中心に－／日本語母語話者による中国語歯擦音音節の習得――音声知覚における知覚的手がかりと後続母音の影響を中心に／有標的指示詞の日中英対照研究／日本語の終助詞と中国語の語気助詞の性差に関する量的研究－女性性に焦点を置いて－

修士論文

日本人大学生の依頼表現について一性差を中心に－／無声無気閉鎖音 +/l, r/ と無声有気閉鎖音 +/l, r/ における声帯振動のタイミングータイ語を中心に－／中国語における限定を表す副詞就 (jiu)/ 只 (zhi)/ 才 (cai) に関する考察ーとりたて機能を視野に入れてー／三重県北部方言における句頭上昇のバリエーションー南関東および大阪方言との比較ー／日本語感情音声の産出における声質の特徴／閩南語話者における破裂音の範疇知覚ー中国語普通話話者・日本語話者との対照ー／日韓語の指示詞の対照研究／タ形の使用から生じる推論についてー中国語との対照を兼ねて／謝罪表現と謝罪ストラテジーの日本語・ウズベク語の対照研究

加藤 高志 准教授

文学修士

フィールド言語学、東南アジア大陸部の諸言語

・*Linguistic Survey of Phong Language in Lao P.D.R.* (Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2013)
・『タイ文化圏の中のラオス:物質文化・言語・民族』(共著、慶友社、2009)

井土 慎二 教授

Ph.D.

音声学、中央アジアやトルコの諸言語

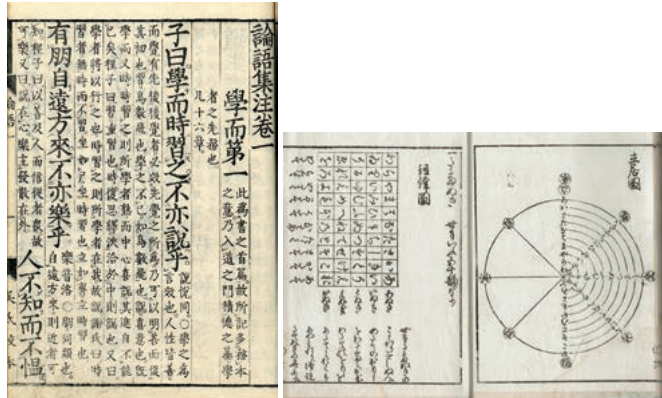
・“Illustration of the IPA: Uzbek” *Journal of the International Phonetic Association*, 55 (2025)
・“A spectral analysis of the voiceless postalveolar fricative in two varieties of Tajik” in *Handbook of Phonetics and Phonology of Modern Iranian Languages* (Springer, 2026)

指導可能領域

音声学／音韻論／形態論／統語論／意味論／語用論／言語類型論／歴史言語学／社会言語学／対照言語学／フィールド言語学／言語接触研究

I

言語文化学繫



日常談話や方言などの「ことば」は人間にとって最も身近な現象です。「ことば」としての日本語に関心を向け、文法や語の意味あるいは音声などのようなしくみを持つか、意思の伝達にどうかかわるか、その歴史的由来は何かと考える。こうした問いが、日本語研究の中核をなしています。

また日本語がなぜどのように研究されてきたか、その意義や動機から研究の根源的基盤を問う学説史、権力が言語をいかに管理し社会がこれとどうかかわるか、また地理的・社会的な条件の違いによって日本語にどのような多様性があり、どう使い分けられるかに関心を置く社会言語学も重要な領域です。日本語の資料は5世紀に遡り、8世紀奈

良時代語以降、体系的な復元が可能です。平安時代以後も文学作品や古文書、訓点資料、古辞書、講義資料、外国資料などがあり、変化の過程の追究も盛んです。日本語研究は、鎌倉時代の古典注釈に源を発し、文語の「てにをは」と「仮名遣い」という技術に磨きをかけて発展してきました。近世以後は、論証の緻密さと合理的推論に特色を発揮して急速な発展を遂げ、近代になって西洋の言語学を導入した後も、伝統的知識を継承しながら人文科学の中で個性的な重みを持つ学統として今日に至っています。現代の日本語学は、言語にかかわる人間行動の根本の仕組みを復元する広い視野を獲得しています。その重要性和学問的関心をますます高めつつあるといつてよいでしょう。

齋藤 文俊 教授

博士(文学)

日本語史、漢文訓読

- ・『漢文訓読と近代日本語の形成』(勉誠出版、2011)
- ・『漢文資料を読む(日本語ライブラリー)』(共著、朝倉書店、2013)

宮地 朝子 教授

博士(文学)

文法史、文法論

- ・『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』(ひつじ書房、2007)
- ・『日本語史研究と文法性判断』『日本語文法』17-2(2017)

博士論文

貝原好古『和爾雅』の編纂に関する研究／擬声語に由来する副詞の歴史的研究／サ系接続表現の史的展開／雅語「ものす(る)」の歴史的研究／中程度を表す副詞の研究／無意志自動詞を出自とする日本語可能表現の歴史的研究／受益・受害構文の歴史的研究／現代日本語の自発に関する研究／格交替を許容する日本語感情動詞の格体制についての研究／現代日本語における形容詞的動詞をめぐって／現代語「ばかり」の諸用法／古代日本語における動詞連接の研究／室町時代から明治時代初期までの促音の表記に関する研究／日本語論説文の文章構造／古代日本語文における現実領域・非現実領域に関する研究

教員からのメッセージ

学部から大学院後期課程までの所属学生が切磋琢磨しあう研究室体制です。広く日本語学全般を指導可能領域としますが、特に大学院では、歴史的な問題意識に基づく課題の設定と追究を重視し、特長としています。



日本語教育学分野で目指すのは「研究も教育もできる日本語教育人材の育成」です。研究能力はもちろんのこと日本語教授能力を高めることも重視しています。その一つが、日本語教育実習です。模擬授業の実践、外部日本語教育機関での実践を通し、教師としての課題や問題意識を明確にします。本分野に所属する学生の修士論文・博士論文の研究については、ハイレベルな学術誌に掲載されることを目標として、全教員が各専門分野の見地から厳密かつ熱意ある指導を行っています。日々の指導の他に、毎月一回分野研究会を行い、分野全体で修士論文や博士論文の執筆をサポートする体制をとっています。本分野の分野研究会は学生主体で運営されており、教員だけでなく学生同士が自由

で活発な議論を行っている点に特徴があります。この他、日本語教育学分野主催で様々な講演会やセミナー、シンポジウムを行ったり、国内外で活躍中の修了生や研究者と密接な連携を保ち、日本語・日本語教育に関するネットワークを広げたりするなど、活発な研究活動を行っています。

修了生の多くは日本、韓国、中国、台湾、ベトナム、タイ、マレーシア、トルコなど国内外の日本語教育・研究機関に勤務しています。大学のほか中学校や高校で日本語教育の知識を生かして働いている人もいます。また、留学生の場合、高度な日本語運用能力を生かして、日本企業や外国企業の日本担当部門で活躍している人もいます。

林 誠 教授

Ph.D.

会話分析・相互行為言語学

- ・『会話分析入門』(共著、勁草書房、2017)
- ・『Conversational Repair and Human Understanding』(共編、Cambridge University Press、2013)

杉村 泰 教授

博士(学術)

現代日本語学(教育文法)、日本語教育

- ・『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』(ひつじ書房、2009)
- ・『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』(共著、日中言語文化出版社、2017)

驚見 幸美 准教授

博士(学術)

現代日本語学(意味論)、日本語教育

- ・『認知言語学 基礎から最前線へ』(共著、くろしお出版、2013)
- ・『ことばのダイナミズム』(共著、くろしお出版、2008)

博士論文

能動的及び受動的意味を表す日本語の機能動詞について／「ばかり」と「だけ」の構文と意味－「限定」と「程度」を中心に－／相互行為における謝罪表現と行為の構成／現代日本語における陳述副詞の記述的研究－〈評価性〉〈意志性〉〈叙法性〉をめぐって－／日中両言語における名詞化・動詞化に関する認知言語学的研究／中国語を母語とする日本語学習者およびモンゴル語を母語とする日本語学習者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について／「出入り」を表すVV型移動動詞の日中対照研究／属性抽出表現の日中対照研究－「～ばい」と「程度副詞＋X」を中心に－

指導可能領域

日本語教育研究／日本語の習得研究／日本語の誤用分析／日本語の意味研究／日本語の語彙・文法研究／日本語の談話分析・会話分析／日本語と他言語の対照研究(2026年4月1日現在)

志波 彩子 教授

博士(学術)

日本語文法(記述研究・対照研究・通時的研究)、日本語教育

- ・『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』(和泉書院、2015)
- ・『日本語受身文の新しい捉え方』(共著、くろしお出版、2022)

安井 永子 准教授

Ph.D. (Communication Studies)

会話分析、相互行為分析、コミュニケーション学

- ・『指さしと相互行為』(共編、ひつじ書房、2019)
- ・『Japanese onomatopoeia in bodily demonstrations in a traditional dance instruction: A resource for synchronizing body movements,』*Journal of Pragmatics* 207, 45-61(単著、2023)

主な就職先

国内:北海道大学、東北大学、秋田大学、秋田大学、一橋大学、東京外国語大学、東京学芸大学、福井大学、名古屋大学、愛知教育大学、京都大学、大阪大学、岡山大学、山口大学、九州大学、琉球大学、北海学園大学、埼玉学園大学、早稲田大学、桜美林大学、麗澤大学、神田外語大学、聖心女子大学、東海大学、国士舘大学、愛知大学、愛知淑徳大学、南山大学、名古屋学院大学、名古屋経済大学、中部大学、中部学院大学、関西大学、関西学院大学、立命館大学、国際交流基金、静岡県立中学校、愛知県立中学校、豊田市職員、日本赤十字社岐阜県支部、東京国際ビジネスカレッジ神戸校、愛三工業、アクセンチュア、アマゾンジャパン、イオン、イトーヨーカ堂、HSK(日本)、オリックス・リビング、関西電力、コムニック、JTB、シャープ、スズラン、ゼンショー、中部技術交流センター、ディップ、ドン・キホーテ、西松屋チェーン、ニトリ、白星社、林テレンプ、久光製薬、PLAN DO、ボラリスエクスポート、楽天



応用日本語学分野は、日本語教育学、日本語学、日本語教育学工、談話研究等の専門的な内容に関する知識を学び、研究力を養うとともに、日本語教育へ応用する力、日本語教育を実践する力を身に付けることを目指します。日本語学に関連する研究は記述文法に加え、日本語教育のための文法研究、対照研究、文法とコミュニケーション論を学ぶことができます。日本語を第二外国語として学ぶ際の諸問題について第二言語習得理論等を通して学び、日本語教育現場への提案を考えます。

日本語を中心とする諸言語の談話分析やストラテジー研究の成果を応用した日本語教育方法論について提案するとともに、学習環境や教室における相互行動分析なども学ぶことができます。また、接触場面における対人関係の構築や言語行動について学び、より良い日本語教育現場への提案を行っています。

さらに、日本語教育の有効な教授法を提案するための理論的背景となる研究を行うとともに、それらの研究成果を応用した日本語教材の開発、その効果と課題を明らかにします。ICT（情報コミュニケーション技術）を利用した日本語教育方法の開発、オンライン日本語教育のための教材開発等についても学ぶことができます。研究手法としては統計分析に基づく量的研究およびナラティブ等をデータとした質的研究を行うことができます。

応用日本語学分野を担当する教員は言語教育センターで日本語教育に携わっており、大学院で学んだ知識や理論、教授法等を日本語教育現場での実践を通して学ぶことができます。日本語教育に関する知識や理論、さらに実証的な研究ができる分野であり、実践力を備えた研究者の育成を目指しています。

許 明子 教授

博士(比較社会文化)

日本語教育学、文法論コミュニケーション研究

- ・「接触場面の意見述への会話に見られる韓国人日本語学習者の発話内容についてーパーソナル・テリトリーとFTA行為に着目して」『言語の研究』(共著、花書院、2019)
- ・『レベルアップ日本語文法中級』(共著、くろしお出版、2013)

俵山 雄司 准教授

博士(言語学)

談話分析、言語運用に対する評価

- ・『現場に役立つ日本語教育研究 4 自由に話せる会話シラバス』(編著、くろしお出版、2023)
- ・『現場に役立つ日本語教育研究 3 わかりやすく書ける作文シラバス』(共著、くろしお出版、2017)

佐藤 弘毅 准教授

博士(工学)

教育学工、日本語教育

- ・『電子黒板・デジタル教材活用事例集』(共著、教育開発研究所、2011)
- ・『初級漢字授業における電子黒板の活用』『名古屋大学日本語・日本文化論集』17 (2011)

博士論文

助言の言語行動に関する日中対照研究一語用論的分析に基づくフェイス侵害可能性の分析を通してー「潜在的日本語教師」のキャリア形成プロセスに関する研究ータイで教育に従事した3名の日本語教育に対する意味づけの変容ー／ほめる場面における談話の分析ー日本語と中国語の初対面・友人同士の会話をもとにー／討論活動に見られる「譲歩」に関する研究ー効果的な「譲歩」のあり方の提案を目指してー／中国人日本語学習者の「意外な展開」の語における接続表現／日本語自称詞と人物像の結びつきに関する体系的研究ー「ボク」「オレ」を自称する人物の発話の分析を通してー／中国人日本語学習者の意見文に関する研究ー日本語教育現場における有効な指導法をめざしてー／読みの目標が読解過程と理解に与える影響ー読解指導の応用に向けてー／Can-do statementsを用いた自己評価における質問項目要因と個人差要因の影響ー韓国・中国JFL学習者の「聞く」技能を対象としてー／日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究ー論証文における文章と文章観の多様性ー／海外の成人日本語教育機関における教師と学習者の教室観

教員からのメッセージ

私たちは、日本語、教育、工学、異文化コミュニケーション、異文化間交流など多岐にわたる教員の専門を結集し、大学院教育に当たっています。この幅の広さは、専門性の求められる大学院においてこそ貴重であり、多様な視点での教育を可能にしています。また、研究力と教育力の両方を備え持つ研究者の育成を目指して、それぞれの教員が多角的な観点から大学院生の研究指導に当たっています。同分野に在学している大学院生は日本語教育学に関連する多様な研究テーマを設定し、高い専門知識を持って、切磋琢磨しながら活発な研究活動を行っています。同分野を修了した多くの若手研究者は日本や世界各国の大学を含む教育機関や民間企業で活躍しており、グローバルなネットワークが構築されています。



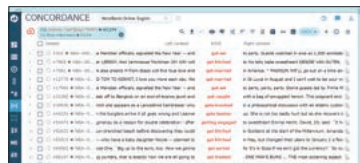
創設以来、当専門における研究と教育の基盤は英語の共時的研究と通時的研究の実証面と理論面からの自然な融合にあり、個人は別としても、専門全体としてこのような方針を維持している例は世界的にも極めて少ない。近年では、こうした特色が内外の関連学会において広く認知されている。

英語はゲルマン語派に属する言語であるが、1066年のThe Norman Conquest以降、約300年もフランス語がブリテン島支配層の言語であったという歴史的事実を見ても分かるとおり、英語は数奇な歴史の変遷を辿ってきた。他方、今日では世界の「共通語」として世界各国で使用され、多種多様な英語の方言が生じてきている。このような言語であるからこそ、共時と通時の両方からのアプローチが必要とされる。



20世紀後半の米国の言語学者N. チョムスキーによって提唱された生成文法理論の輪郭が見えてきた段階で、言語研究の焦点が現実の言語運用を可能にする人間頭脳の内的構造に移行すると、英語学の分野でも母語話者の内的言語能力を追究する認知科学的研究が進んだ。当専門もこの点に注目し、一般言語理論の研究を進めると同時に、現代英語の電子コーパスだけではなく史的電子コーパスも導入し、英語に関する言語事実の観察を重視しながら、共時的研究と通時的研究の融合を目指している。

英語学の論文作成には、英語母語話者からの発話データの収集も重要であり、実用的な英語力を身につけることも当然ながら求められる。



大名 力 教授

教育学修士

生成文法、言語学の方法論、英文法、英語書記体系論

- ・『英語の文字・綴り・発音のしくみ』(研究社、2014)
- ・『コーパスと語用論研究』(共著、ひつじ書房、2025)

田中 智之 教授

文学修士

生成文法、(史的)統語論

- ・「The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,」*Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10 (2007)
- ・『生成文法と言語変化』(共著・監修、開拓社、2024)

博士論文

A Study of the Development of the *Speaking-of* Construction in Present-Day English／Exploring Syntactic Phenomena Based on Copy (in) Visibility／A Study of Inversion Constructions in English／Synchronic and Diachronic Aspects of Floating Quantifiers in English／Synchronic and Diachronic Aspects of Adnominal Past Participles in English／A Synchronic and Diachronic Study of *That*-clauses in English／Synchronic and Diachronic Aspects of Locative Inversion and Negative Inversion in English／An Internal and External Syntax of Noun Phrases in the History of English／A Synchronic and Diachronic Study of Gerundive and Participial Constructions in English／A Minimalist Approach to Preposition Stranding and Pied-Piping in English／A Diachronic Study of Passives in English／A Minimalist Approach to Ellipsis in the History of English／A Diachronic Study of the Structure of English Noun Phrases

修士論文

A Diachronic and Synchronic Study of Comparative Constructions in English／Synesthetic Metaphors in English and Their Relationship to Crossmodal Correspondences／The Development of Infinitival Complements of Causative Verbs in the History of English／A Synchronic and Diachronic Study of Retroactive Gerunds in English／A Diachronic Study of Infinitival Complements of *Believe*-verbs／Diachronic Changes in the Conditional Inversion Construction in English／On the Semantics of *Beyond*, as Compared with *Over*／A Synchronic and Diachronic Approach to Subject *Wh*-questions in English／The Historical Development of the *N-after-N* Expression／Iconicity Emerges from Language Experience: Subjectivity in English and Japanese Ideophones／A Synchronic and Diachronic Syntax of Reflexive Binding／Colour Terms and Metaphors in English／A Diachronic Study of *Like*／Diachronic Changes in Passives of the Double Object Construction in the History of English

講義題目

英語学概論／英語学入門演習／英語史／英語学講義／英語学演習／英語学研究／共時英語学基礎演習／通時英語学基礎演習／英語学発展演習／英語学総合演習／英語学修士論文演習／英語学博士論文演習 など



英米文学研究室(現「分野・専門」)は、開学以来優れた人材を輩出してきた伝統ある研究室のひとつです。

その歴史をひもとくと、文学作品の読み方が変化してきたことがわかります。時代とともに新しい文学が生み出され、同時にその解釈の方法やアプローチの仕方も変わってきたのです。しかし、その根底には、ひとりの読み手として文学作品に向き合い、作品についての自分の考えを言葉にしようとしてきた人々の存在があります。多くの読み手が、作品を構築する言葉や形式、そこに示された物語世界や思想、背景をなす社会や文化などに注目し、英語圏の文学作品について論じてきたのです。英米文学研究室で学ぶことは、こうした時代を越えた読み手のつらなりに加わることを意味します。

今関 裕太 准教授

博士(文学)

イギリス文学、アイルランド文学、メディア論

- ・“Flann O’Brien’s Radio Jamming”, in *Flann O’Brien and the Nonhuman: Environments, Animals, Machines*, Cork University Press, 2024, pp. 235–251.
- ・『詳解 ラカン「サントーム」——ジョイス・結び目・精神病』(共著、福村出版、2025)

衣川 将介 准教授

PhD

アメリカ文学、探偵小説

- ・“Wordplay and Encoded Writing in Mark Twain’s Literature,” *Mark Twain Journal* 60.1 (2022)
- ・“Agatha Christie’s Secret Fair Play,” *Narrative* 26.2 (2018)

博士論文

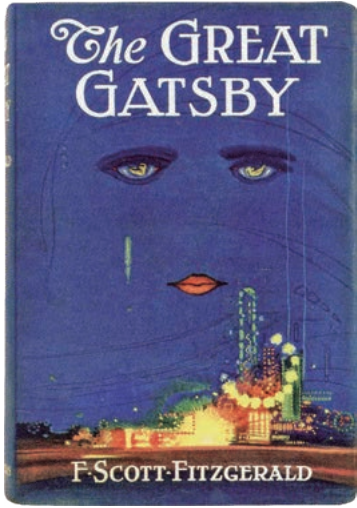
Lost and Emerging Manhoods in Melville’s Later Novels／Ernest Hemingway and East Asia: Japanese and Chinese Influences on His Writings／〈他者〉への共感と対話——エリザベス・ギャスケルの小説における〈語り〉の可能性／Between Counterculture and Consumerism: Transformations in Presentation of Beatniks in American Comics since the 1950s／Urban Pastoralism in Theodore Dreiser’s Works／ギャスケル文学における母娘関係と女性の生き方——女性の持ち場と価値観の変容／Givers in Exile: Americanization, Gender, and Reciprocity in the Works of Anzia Yezierska／ディケンズの想像力にみる増殖と繁茂／女性とミッション——1780～1860年の英国における宗教的使命感と女性の役割／ディケンズの歴史観——『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』研究

修士論文

Dependence and Independence in *Great Expectations*: What Causes Pip’s Self-deception／Watching and Showing: Portrayals of Janie in Zora Neale Hurston’s *Their Eyes Were Watching God*／Returning and Not Returning: Fantasy and Reality in Poe’s Short Stories／The Female Protagonist Lyra in *His Dark Materials*／Uncomfortable Relationships in *The Woman in White* and *The Law and The Lady*／J. R. R. Tolkien’s Art of Fantasy and Sub-Creation: On Fairy-Stories, *The Hobbit*, and *The Lord of the Rings*／*Jane Eyre* in Japanese／Time Travel with Unconsciousness in *Tom’s Midnight Garden*／A Study of *The Nether World* by George Gissing: Leisure Activities and their Influence on the Working Class／Identification and Identity in *Tom Brown’s Schooldays*／What Is “Select” in Mudie’s Select Library?

指導可能領域

英語圏文学／イギリス小説／英詩／イギリス文化史／アメリカ小説／アメリカ詩／アメリカ文化史／文学批評理論／メディア論／探偵小説



授業では英米を中心とする英語圏のさまざまな文学作品をとりあげます。時代はシェイクスピアが活躍した16～17世紀から、トニ・モリスンやカズオ・イシグロといったノーベル賞作家を輩出した現代におよびます。個別の小説、詩、戯曲をとりあげるとともに、児童文学や環境文学、批評や翻訳理論などについて学ぶこともあります。こうした授業を通して、また卒業論文の執筆によって、英語で書かれた文学作品を読む力を高め、英語圏の文学やその背景をなす文化・社会についての理解を深めていきます。

英語圏の文学作品は、しばしば日本のものとは異なる、多様な物語世界と、卓抜な言語表現、そして深い思考のすじみちを示してくれます。母語の外の世界を、私たちとともに歩いてみませんか。

TOMKINSON, Fiona Gail 准教授

PhD

- ・“Iris Murdoch and *The Tale of Genji*” Chapter 6 in *Iris Murdoch and the Literary Imagination*, ed. Miles Leeson and Frances White (London: Palgrave Macmillan, 2023)
- ・“The Aesthetics of Perfection and Imperfection in Iris Murdoch’s *An Accidental Man*” in *Imperfectionist Aesthetics in Art and Everyday Life*, ed. Peter Cheyne (New York: Routledge, 2022)



■実験風景

第二言語や外国語を習得する過程は、母語を習得する過程とどのようになるのでしょうか。学習者はどのようにして第二言語を視覚的・聴覚的に処理しているのでしょうか。第二言語による産出と理解の発達を促進または抑制する要因はどこにあるのでしょうか。英語教育学分野では、外国語学習にまつわるこうした様々な疑問に対する答えを、様々なアプローチから研究して導き出します。スタッフの研究領域の視点からは、第二言語スピーキングとバイリンガルの単語認知をコアとする心理言語学、AIを用いた学習や評価の開発を含み、実験の様々なノウハウ取得にもつながる教育工学・言語教育工学、種々の外国語教授

山下 淳子 教授

Ph.D. (Linguistics)

第二言語習得研究

- ・Predictors of second language reading comprehension ability: a longitudinal study with learners from grade 9 to 11 in an English as a foreign language context. *Reading and Writing*, 37(10) (2024)
- ・*Reading in a Second Language: From Theory to Practice (2nd ed)*. (Cambridge University Press, 2022)

村尾 玲美 准教授

博士(学術)

第二言語習得論

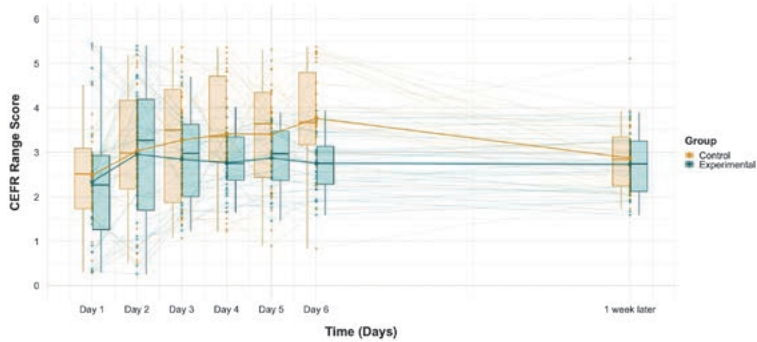
- ・Reliability and Validity Assessment of Working Memory Measurements. *Applied Psycholinguistics*, 46 (2025)
- ・The Effects of Syllable Sequence Frequency on EFL Learners’ Speech Recognition, *Annual Review of English Language Education in Japan*, 28 (2017)

博士論文

Conceptualisation of event roles in the first and second languages by Japanese speakers of English／Does Vocalization Promote Learning L2 Multiword Expressions? Exploring the Factors Affecting Shadowing Training／Linguistic Influences on Comprehensibility in Japanese EFL Learners’ Speech／Metaphor Interpretation and Analogical Reasoning in First and Second Languages／Activation of Color Information in Second Language Comprehension／The Effects of Filled Pauses in English Oral Production on L2 Listeners’ Linguistic Information Processing／Bidirectional Cross-linguistic Influence in Japanese and English: A Psycholinguistic Study of Visual and Auditory Word Recognition

修了生の声

英語教育学分野では大学院生の多くが量的研究を行います。私は入学当初、分析という言葉にすら馴染みがありませんでした。しかし、どの先生方も研究初心者ががついていけるように根気強く指導くださいました。また、コロナ禍という困難な状況の中でも大学院生同士で励まし合い、互いに切磋琢磨できる仲間にも恵まれました。博士後期課程では人文科学研究科の研究助成を利用して国際学会で研究発表させていただきました。この学会がきっかけで海外ポスドクのご縁があり、カナダのウィンザー大学で研究滞りする運びとなりました。アカデミアは厳しい世界ですが、英語教育学分野は、努力する人を熱心にサポートしてくれる場所だと感じています。 生田美希(2023年度博士後期課程修了)



■診断フィードバックの有無によるスピーキング練習の学習効果を追跡 Suzuki et al. (2025)に基づき作図

法および外国語教育の中で依然大きな比重を占める語彙と読解に関する問題と、一層重要性を増しているスピーキングやライティング、さらに言語能力の測定にも注目する第二言語習得論等と多岐にわたっています。関連諸科学の知見、成果、方法論等を総合的、有機的に学ぶこと、ならびに、自らの問題意識に端を発する研究を実践することを通じて、英語教育学の高度な専門知識と研究力を有する研究者・教育実践者を育成することに力を入れています。また、中学・高校の外国語(英語)の専修免許の取得につながる授業も多く開講しています。

三輪 晃司 准教授

Ph.D. (Linguistics)

心理言語学、バイリンガリズム、形態論、書記体系

- ・Eye movement control in morphographic word recognition. In H. Winkler, & H. K. Pae (Eds.), *Handbook of nonlinear writing system: Complex processes and learning challenges* (Springer, 2026)
- ・Nonlinearities in Bilingual Visual Word Recognition: An Introduction to Generalized Additive Modeling, *Bilingualism: Language and Cognition* (2021)

鈴木 駿吾 准教授

Ph.D. (Linguistics)

第二言語スピーキング、言語テスト

- ・Feedforwarding Diagnostic Language Assessment: Artificial Intelligence- (AI-) Driven Weakness Identification and Contextualised Feedback for Second Language Speaking, *Language Testing*, 42(4) (2025)
- ・The Moderating Role of L2 Proficiency in the Predictive Power of L1 Fluency on L2 Utterance Fluency, *Language Testing*, 42(1) (2025)

■院生による勉強会「基礎研」の紹介

外国語教育メディア学会(LET)中部支部外国語教育基礎研究部会(通称「基礎研」)では、若手の研究者や大学院生が中心となり、外国語教育に関する概説書の輪読や統計手法について学ぶ週例会を学内で開催しています。



修士論文

How Meaningfulness and Frequency Affect the Processing of Multiword Chunks in a Second Language／英語の語彙習得におけるジェスチャーの効果／How Are the Mnemonic Effects of Alliteration Influenced by Oral Repetition and Awareness Raising?／A corpus study of verb argument constructions in essays of Japanese English learners and native English speakers／Reliability and validity assessment of working memory measurements／The Relationship between Foreign Language Classroom Anxiety and Japanese High School Students’ Achievement of English as a Foreign Language／Epistemic Stance Markers in Japanese EFL Learners’ Spoken Corpus: Effects of Speech Types and Proficiency／Investigating the Development of Noun Phrase Complexity in Japanese College Students’ English Essays: A Longitudinal Learner Corpus Analysis



古来ヨーロッパにおける異文化交流の中心地の一つであるフランスでは、豊かな文化が華開き、明治以降の日本の文人や芸術家に大きな影響を与えています。また音の美しさを追求しつつ構築されたフランス語の響きは私たちに魅了してやみません。その一方で、様々な民族を受け入れ続ける土壌ゆえに、軋轢や変動を経た歴史をもち、今日でも激動の世界情勢の中で深刻な問題に直面しています。論理性と言葉の正確さを追求しつつ対話を重んじ、批判精神と分析力を特徴とするフランスのエスプリが生まれたのは、こうした様々な要因があるといえるでしょう。

私たちの分野専攻では、中世から現代に至るまでのフランス語圏における文学・言語・思想・芸術・文化を対象として、作品読解および言語研究を通して人間性を多角的に探求することを目的としています。とり

わけコンピュータを活用したテキスト校訂、フランス語と日本語の対照を中心とする言語分析、草稿研究等のテキスト批評、文学と美術評論の関わり、詩法(音やリズムと意味の関係)に関する研究が特色です。

小説、詩、戯曲などの原文テキストを正確に読解するための高い語学力と、会話や作文を中心とするフランス語の実践的な運用能力の習得、向上を第一の教育目標とし、さらに文学・映画・美術・音楽などを題材としてフランス語圏の文化に関する幅広い教養を身につけるとともに、多様な視点を備えた批評精神を養います。学部生はDELTA等のフランス語能力検定や留学にも取り組み、博士前期・後期課程では国際的水準の研究発表を目指します。教員、公務員、新聞・出版業などの民間企業、大学での研究等、卒業生は様々な分野で活躍しています。

小栗 栖 等 教授

博士(文学)

中世フランス語フランス文学(12-16世紀)

- 『古フランス語入門:11世紀末から15世紀末まで』, Amazon Independently published, 2022.
- Édition électronique du « Roland » de Cambridge, Projet Rollant t. 2, La Geste Francor 2, Nagoya, 2023.
- 『初級フランス語文法』, Amazon Independently published, 2022.

加藤 靖恵 教授

Docteur (littérature et civilisation françaises)

近現代フランス文学

- L'Évolution de l'univers floral chez Proust, Honoré Champion, 2019
- Sur les traces de John Ruskin, François Proulx と共編, Honoré Champion, 2026

博士論文

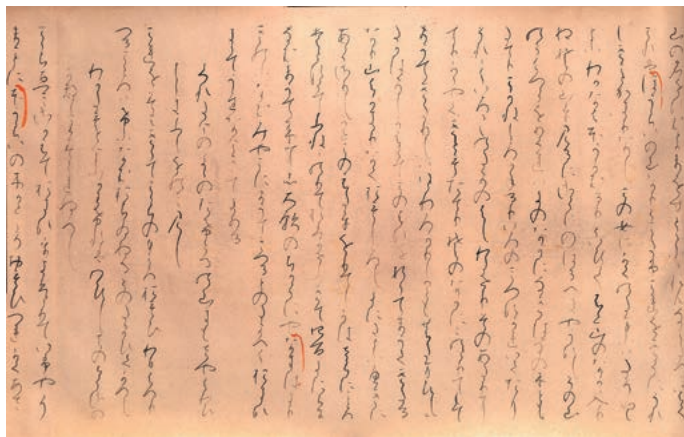
フロベールの写実主義とグロテスクの〈美〉／バルザック『あら皮』—幻想に隠された広大な構想—／第二帝政下におけるボードレールの詩学：挫折した詩集『冥府』を通して／シャルル・ペロー『古代人近代人比較論』と新旧論争／バルザックの作品制作詩学—『パリにおける田舎の偉人』の生成論的読解の試み—／ロートレアモン『マルドロールの歌』及びイジドル・デュカス『ボエジー』のレクチュール—1970年代における両作品の受容史／小説から演劇へ—レーモン・ルーセル『アフリカの印象』の翻案劇をめぐる／クレチアン・ド・トロワの物語にみるイロニー—修辭学的研究から神話学的研究—／テオフィル・ゴーシェとスペイン—スペイン文化の受容から創作へ—／ピエール・ジャン・ジュヴの詩作品における色彩語の研究

修士論文

ミシェル・ピュートル『トランジット』—「日本芸術の二十一年の古典」におけるエクフランス／ベルクソンとブルーストの死生観—夢と靈魂不滅思想をめぐる／エリファス・レヴィとメスメリズム／催眠術と自我の喪失—モーパッサンの幻想小説／フランソワーズ・サガンが見出した「壊れない笑い」の意義／ジョルジュ・サンド『モープラ』におけるルソー受容について／セリヌ『ギニョルズ・バンド』における移動の実現可能性／マルクリット・デュラスにおけるホロコーストの表象／シャトーブリアンと太宰治における「自己救済」／倒置を伴う強度・照応の副詞 si, tant, tellement について／Le Faust de Gounod comme adaptation: le diable et la jeune fille(アダプテーションとしてのグノー『ファウスト』—悪魔と少女—)

授業題目

Grammaire essentielle du français, niveau B1 詳説／仏文和訳の理論と技法／フランス語前置詞に関する諸問題／日仏対照言語学の諸研究／フランス語の歴史／中世フランス文学の作品を読む／中世フランス文学の世界／フランス詩読解／現代フランス文学読解／フランス文学におけるジャポニスム／ブルースト『土地の名・土地』を読む／ルソーの自然観／フランス文学史講義／Analyse et compréhension de textes venant de médias français(共通)／Littérature “francophone” pour comprendre les colonisations et décolonisations／Société et culture françaises(共通)／Les références picturales, architecturales et musicales qui nourrissent la littérature française(共通)



日本文学研究室は、現在、中古文学と近世文学を専門とする2名の教員から構成されている。また、他研究室に所属する中世文学、近現代文学を専攻する教員とも緊密に連携しつつ、研究・教育を推進している。古代から近現代にいたる様々な作品・作家・ジャンルを扱うが、必ずしも日本語で書かれた作品や、日本語を母語とする作家に限定しない。日本人による漢詩文や、外国人の書いた日本語の作品も重要な研究対象となる。これらの作品や作家を分析・解釈する方法もまた多様であり、過去からの膨大な蓄積を有しているのが日本文学研究の特徴でもある。実証性を重視する伝統的な学風に立脚しつつも、近年の批評理論などの成果も導入して研究の刷新と活性化をはかっている。いずれにしても書誌学・文献学の幅広い知識と、本文の正確な読解力・分析力は必須であり、研究室ではこうした基礎学力の修得と養成を重視している。

大井田 晴彦 教授

博士(文学)

平安朝物語文学

- 『王朝物語の世界』(三井書店、2022)
- 『竹取物語 現代語訳対照・索引付』(笠間書院、2012)

博士論文

荒木田麗女研究／古浄瑠璃の表現世界／林義端小説研究／『平家物語諸本』に見る人物造型の独自性／御伽草子における笛説話の形成 ほか

修士論文

有間皇子自傷歌の研究／高市黒人羈旅歌八首における構造と意識／前田家本『枕草子』の研究／『源氏物語』の女君の死について／時代物浮世草子と近世後期江戸小説

加藤 弓枝 准教授

博士(文学)

日本近世和歌文学、日本書誌学

- 『六位の書肆吉田四郎右衛門』『近世文藝』102(2015)
- 『小沢蘆庵自筆 六帖詠藻 本文と研究』(共著、和泉書院、2017)

講義題目

日本文学概論／日本書誌学入門／文学史上の源氏物語／源氏物語演習／和泉式部集演習／説話文学の研究方法を学ぶ／中世和歌文学研究における諸問題／日本近世文学を読む／近世文人の書簡・日記を読む ほか



「中国文学」は「漢文」とは少し違います。「漢文」は日本の古典ですが、「中国文学」は外国文学です。文語体で書かれた詩や小説も、口語体で書かれた小説や戯曲も、現代中国語で書かれた作品も、等しく外国文学です。この研究室では、約2500年前に編纂された最古の詩集から始まり、詩、小説、戯曲など、多彩な文学を学べるとともに、文字学を中心とする古典中国語学から文法を中心とする現代中国語学まで、幅広く学ぶことができます。

20世紀に西洋から近代的な研究法が入ってくると、文学では膨大な作品が新たな手法で研究されるようになり、中国語も文法やさまざまな言語現象を体系的に研究する時代へと飛躍しました。現在進行形で発

展する研究方法も取り入れながら、現代に生きるわたしたちが、長い歴史を持つ中国語学・中国文学を学ぶ意味を、一緒に探しませんか。

学部で中国語中国文学の基礎的な知識と読解・運用方法を学び、自ら研究テーマを見つけ立論し卒業論文を完成させる力をつけた後、博士前期課程へ進学することになります。前期課程の院生に求められるのは、自力で課題を見つけ、解決の見通しを立て、適切な方法を用い、検証可能な客観性を持った結論を導き出す研究論文を執筆することです。修士論文が成って博士後期課程に進学した後は、より発展的で独創的な研究が求められます。その研究活動を支えるスタッフが、以下の6人です。

丸尾 誠 教授

博士(文学)

現代中国語文法

- ・『現代中国語方向補語の研究』(白帝社、2014)
- ・『現代中国語の空間移動表現に関する研究』(白帝社、2005)

星野 幸代 教授

博士(文学)

近現代中国文学・舞踊史

- ・『二戦前後の中日身体表現藝術—影像・戯劇・舞踊・音楽・漫画』(共著、台北秀威資訊出版社、2024)
- ・『労働と身体の大衆文化』(共著、水声社、2023)
- ・『翼賛体制下のモダンダンス—厚生舞踊と「皇軍」慰問』(汲古書院、2022)

佐野 誠子 教授

博士(文学)

中国古典文学

- ・『怪を志す—六朝志怪の誕生と展開』(名古屋大学出版会、2020)
- ・『中国古典小説選2 六朝志怪』(明治書院、2006)

博士論文

現代汉语多义结构“VA了”的句法语义研究／鏡像分布をなす動詞修飾成分の研究—現代中国語におけるインターフェイスの諸相—／中国語における「再帰」の諸相—日本語との対照を兼ねて—／六朝隋唐期における僧侶の身体をめぐる言説研究—中国本土と仏教身体観のせめぎあい—／元代『詩經』解釋學の研究—章と章の關係性の解釋を手がかりに—／日中戦争と中国近現代文学の自己変革：「西洋的近代」の超克／蕭紅の文学創作における左翼性と人間性／景徐周麟の花鳥詩文における詩想と思想／現代中国語における“个”の主観化に関する研究／バナナ表象から見る冷戦期東アジアの文化動態—日本・台湾を中心に／現代中国語における語気副詞の研究—主観性と主観化という観点から—／現代中国語における中間構文の形式と機能／現代中国語の“让”構文における意味的連鎖の形成／『左氏會箋』の基礎的研究

指導可能領域

近現代中国文学・舞踊史／現代中国語学／中国古典語学／中国語教育／日中対照言語学／中国古典文学(文言／白話)／日中比較文学／日本漢文学

田村 加代子 准教授

修士(文学)

中国古典語学

- ・「『段玉裁『説文解字注』注釋の動機及び論理—「絲」を例に(上)』」『饗養』32(2025)
- ・レイ・チョウ『女性と中国のモダニティ』(訳、みすず書房、2003)

笠井 直美 准教授

博士(文学)

中国古典文学

- ・『吳郡寶翰樓初探』『古今論衡』27 (2015)
- ・『北京大学圖書館藏『忠義水滸全傳』—「萬曆袁無涯原刊」情報の一人歩き』『名古屋大學中国語學文學論集』21 (2009)

勝川 裕子 准教授

博士(文学)

現代中国語文法

- ・『中国語における〈不可能〉とモダリティ』『日中対照言語学研究論集 第2巻』(和泉書店、2024)
- ・『現代中国語における「領属」の諸相』(白帝社、2013)

修士論文

中国語の方向補語の意味拡張に関する考察—“起来”を中心として／中国語の“把OV了”構文に関する研究—「事象の界変」の観点から—／中国語における〈必要〉を表す助動詞の連用について—“必須”“得”“应该”“该”を中心に—／「古鏡記」考—ブロップ理論から見る「古鏡記」の独自性—／『聊齋志異』裁判故事における法的思考／葉聖陶の五四時期の作品における女性表象への再考—強国願望に包まれた個としての女性の解放／戦時期における梅娘の文学実践の再考—女性表象とコロニアル体験を中心として／現代中国語における存現文の範疇と構文機能について—非典型的な事例を中心に—／現代中国語における虚化した移動動詞“来／去”の意味機能について／中国現代ウェブ小説と鴛鴦胡蝶派との関係—Priestの『殺破狼』を例に／穆時英作品の女性観をめぐる再検討—鏡としての女性表象と自己の模索／中国におけるモダンダンスの役割変容／アニメイビーから慶山へ—『夏摩山谷』からみる作風の変化／現代中国語における「注視点」について—“V了”“V着”を中心に／辛棄疾の「賀新郎」の音象徴研究—「賀新郎」の押韻特徴と句式構造を中心に—／鮑照山水詩における季節について—秋と冬を中心に／中国仏教文献における「身体解体・復元」モチーフの受容と変貌—六朝から唐代にかけて—／朱熹『詩集傳』における「賦而興」の研究／清代江聲の轉注思想について／『聊齋志異』における会話表現／『三國志演義』託李評の研究



哲学は、広範な問題意識と緻密な思考力を要求する学問であるため、みなさんのなかには哲学にある種の「近寄りがたさ」を感じておられる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、哲学は、この世界でさまざまな疑問や問題に直面した私たち個々人が、その究極的な解決を自分自身の生き方に照らし合わせてどこまでも追究していく知的営為であり、その意味で、私たちにとってこれほど「身近な」学問はないともいえるのです。

当研究室では、哲学本来の立場を基本としつつ、原典の厳密な読解や議論の分析・検討を通して本物の思考力を涵養すべく研究・教育活動を行っています。学生のみなさんは、哲学の歴史の中から自由に題材を選んで学ぶことができますが、その題材に応じて哲学史や探究領



域の深い理解、外国語の素養、論理学の修得などが必要になります。なにより、積極的に教員からの助言を求めて自主的に研究していく姿勢が求められます。

本研究室には例年、学部生・大学院生がそれぞれ20名程度在籍しています。さらに、博士候補研究員や博士研究員も数名所属しており、多様な研究段階にあるメンバーが互いに刺激を受け合う環境です。演習では、納得いくまで質問、討論することができます。卒論では、プラトン、アリストテレス、デカルト、ヒューム、ロック、カント、ミル、ヘーゲル、フッサール、ハイデガー、デリダ、フーコー、ラカン、西田など、古今東西の哲学者だけでなく、倫理学、認識論、宗教等の種々の現代的なテーマも扱うことができます。

岩田 直也 准教授

Ph.D.

西洋古代哲学

- ・“Socrates’ First Voyage in the *Phaedo*,” *History of Philosophy & Logical Analysis* (2021)
- ・“Aristotle on Geometrical Potentialities,” *Journal of the History of Philosophy* (2021)

鈴木 真 准教授

Ph.D.

道徳哲学、英米哲学史

- ・“Moral Realism and the Wide-Spread Directed Change in Moral Judgments,” *The Journal of Philosophical Ideas Special Issue* (2017)
- ・「いとわしさと嗜虐のあいだ—^{アラスマイナス}「正 負 場合分け功利主義」の挑戦」『人口問題の正義論』(世界思想社、2019)

博士論文

持続への回帰—ベルクソン「持続」概念の探究—／ウィトゲンシュタインの後期哲学についての研究— 確実性について—／前期ハイデガーにおける生の哲学／ジョン・ロールズの正義論／The topology of “true nothingness”: A genealogy of Kitarō Nishida’s conception of “bashi”／構造主義言語学における『音楽』概念の存在論的考察／メタファーに関する哲学的・認知言語学的考察／小林秀雄批評の哲学的分析—ベルクソン哲学の視点から—／ハイデガー哲学における自由の問題について—基礎存在論とは何か—／ハイデガー『存在と時間』における実存と真理／経験機械・偽りの快楽・異質性問題—福利論における快楽説の擁護—

学生からのメッセージ

「友情とは何か」「目の前の赤いリンゴはなぜ存在するのか、本当に赤い色なのか」。検索すれば何らかの回答がすぐに得られる時代だからこそ、あえてじっくり問いと向き合い、自らの考えを深めていくことも面白いと思います。先人たちの思索を道標に、時には研究室の仲間とも問いを共有しながら、皆さんと一緒に、楽しんでみませんか。(博士後期課程1年 中山朋愛)

布施 哲 准教授

Ph.D.

政治哲学、近現代思想史

- ・「俗物に唾することさえなく — フーコー、シュトラウス、原理主義」『現代思想と政治：資本主義・精神分析・哲学』(平凡社、2016)
- ・「勝敗の彼岸 — 戦後イギリス「新左翼」の一断片を小さな鏡として」『〈ポスト68年〉と私たち：現代思想と政治の現在』(平凡社、2017)

真田 美沙 准教授

Ph.D.

ドイツ近代哲学

- ・*Unendlichkeit und Maß: Das Zustandekommen des Aufbaus der Lehre vom Sein in Hegels Wissenschaft der Logik* (Königshausen & Neumann, 2024)
- ・「ヤコビ哲学における学的証明とその労働に関する批判についての考察：ヘーゲルのヤコビ批判の再検証のために」『ヘーゲル哲学研究』(2023)

修士論文

アリストテレスとアナクサゴラスの世界理解の比較／プロティノスによる世界万有の生成の説明体系／人工妊娠中絶との関連における胎児の道徳的地位の哲学的検討—英米倫理学における議論を中心に／レヴィナスにおける逃走の行方／アレント物語論における「物語」とは何か／リサ・フェルドマン・バレットの構成主義的情動理論の検討／心の哲学における媒体外在主義の検討／スピノザの「能力」とショーペンハウアーの「意志」／カンタン・メイヤス—における『偶然性』について／道徳的真理とは何か／破壊する／される基底材—中・後期デリダにおける言語論／初期レヴィナスにおける存在論と他者論／解釈的不正義の不正さについて／アリストテレス『ニコマコス倫理学』における倫理的知識の探求方法



「西洋古典」とは、ギリシア語かラテン語で書かれ古代から伝承された作品群のことです。そこには歴史記述や哲学的議論のほか、叙事詩、悲劇・喜劇、抒情詩、諷刺詩、弁論、小説などの多種多様な文学的創造がありました。それらの文学的創造の中でも、重要な要素は神話です。自由な発想で語られた彼らの神話は、今でも色褪せない骨太の古典文学作品を無数に生み出しました。また、ギリシア・ローマ神話が今日でも世界中の人々の想像力の糧となっていることは周知の通りです。

ギリシア・ローマの古典を、さまざまな角度から研究する学問が西洋古典学です。人文学において重要な位置を占めますが、これを専門的に学べる大学は日本に僅かしかなく、そのひとつが名古屋大学です。

名古屋大学の西洋古典学の特長は、神話を題材とする文学に重点を置き、倫理学、宗教学、社会史、人類学の幅広い関心をもって研究と教育を進めているところにあります。

当研究室では、西洋古典と神話についての講義をはじめとして、古典文学研究にアプローチするための演習のほか、実際にテキストを原典で読むために必要となる、ギリシア・ラテン語の様々なレベルの授業を開講しています。古典テキストを扱うための文献学的方法と知識、注釈や研究書の用い方なども教授します。授業における討論と個人指導を重視し、各自が自由に選択したテーマを研究発表する機会を多く設けています。

Ph.D.(Classics)

川本 悠紀子

准教授

西洋古典学、西洋古代史

- ・「オイディウス『変身物語』」『名著で読む世界史120』(山川出版、2016)
- ・「ウィトルウィウスの『建築書』の古代ローマにおける受容」『西洋美術史における「古典」の創出(古典主義再考1)』(中央公論美術出版、2020)
- ・「キケロの書簡にみるアテナイの哲学学校と古代ローマの別荘」『古代地中海世界と文化的記憶』(山川出版、2022)

卒業論文

『オデュッセイア』における金銀銅の色彩表現／ブルタルコス『ピュティアの神託について』におけるシビュラ／ギリシア悲劇に見る〈恐ろしい〉二人の女達／プラウトゥス『アンビトルオ』におけるメルクリウスの役割／セネカ『メデア』における作劇の方針について－メデアとアグリッピナの類似性に着目して『コロノスのオイディプス』におけるオイディプスの機れについて／『エウメニデス』におけるアポロンの主張とアテナの判決について／親殺し・子殺しのギシア悲劇－古代社会における現実をふまえて／アブレイウス『黄金の驢馬』と改変－イシス信仰を中心に／ウェルギリウス『アエネーイス』における炎の異兆／『イリアス』における *thumos* として表される英雄の諸感情と共同体／『オイディプス王』における神託の意義について

修士論文

キケロー『弁論家について』における執筆目的に関する考察／『イリアス』における予言の役割／オイディウスの諸詩篇における恋と狂気の関係について／ソポクレス『ピロクテテス』における「悲劇的英雄性」についての考察／『アエネーイス』4歌における Tellus 女神の役割／エウリピデス『ヒュブシビュレー』における主人公の嘆きとアルゴー船／ギリシア悲劇の中の *oiktos*－憐みの感情が劇展開に与える影響について／星座名エンゴナシン－複数形の意味／パライバトス『ペリ・アピストーン』論－序文の2原則を踏まえた全体の分析／冥界行による『オデュッセイア』のテーマ融合－オデュッセウスの自然死と帰郷

博士論文

ブルタスコス『対比列伝』と初期ローマ人／セネカ悲劇研究 古代ローマにおけるドラマトゥルギー／アキレウスの死後の物語の変遷における『イリアス』の意義について／古代ギリシアにおける理想の「知」－古典期アテナイの諸作品を手掛かりとした人間の知と神の関係性

教員からのメッセージ

叙事詩や悲劇の力強さやギリシア・ローマ神話の奥深さを、翻訳でいいからじっくり味わってみてください。原語で読んでみたいパッセージがいくつも現れるでしょう。それが西洋古典学を学ぶ最大の原動力となります。



中国の思惟、または中国人的な思惟を研究するのが、本研究室である。

中国大陸では、古来、さまざまな思惟が展開されてきた。人間論と、それに裏付けられた政治思想、特色ある宇宙論、道教や中国仏教などの宗教、自然科学、言語学…等々。そして、それらは、中国のほとんどあらゆる種類の書物、および文化の諸事象や事物の内に貫徹し、われわれの研究対象になるのだ。

また、それらに影響された朝鮮半島や日本の思想宗教、とりわけ「漢学」なども、研究対象に入る。だから、中国哲学研究の対象は、きわめて広く、深く、多様だ。その研究は安易な道のりではないが、あえてそれに挑戦する意欲の持主を、われわれは歓迎する。

中国哲学の研究方法は、近年、現地調査やコンピューター利用等の方法も模索されているが、文献研究を避けて通ることはできない。われわれの研究室でも、演習形式の授業による文献の精読にもっとも重点をおいている。それは、精確な語学的な理解をふまえた上での哲学的な解明や思想史的な把握を達せんとするからだ。

古人の言に「一隅をあげて、三隅を返す」とあるが、そのような意欲的な態度でのぞめば、密度の高い議論を通じた勉学が可能である。そのような場が、本研究室である。

佐野 大介

准教授

博士(文学)

中国倫理思想史

- ・『孟子』(KADOKAWA、2015)
- ・『「孝」の研究』(研文出版、2016)
- ・『日本の孝と懷徳堂』(汲古書院、2025)

博士論文

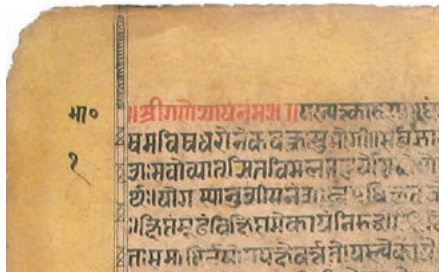
秦漢孝経學史的研究／二十四孝の研究／緯書研究／清朝考証學和它的時代／無の心身論／牛頭山初祖法融禪師研究／初期道教地域性相關問題研究／『喫茶養生記』に見える宗教思想－道教との関わりを中心に－／善導教義における信の確立

修士論文

『喫茶養生記』における中国思想の受容／『山海経』に見える風雨の神／『論語古訓外伝』に見える太宰春臺の聖人観／『墨子』の政治及び文化の思想／「楽」の扱いからみる董仲舒の思想／陳元賛『老子経通考』の研究／日本に伝わる『孝経述議』／朱熹の『論語』解釈とその変遷／林希逸の『老子』解釈について／中國の佛教における牧牛喻の傳統 一漢譯佛典の所説を中心に など

講義題目

孔子研究／清朝考証學の群像／汪中「述学」精読／『朱子語類』精読／閻若璩『尚書古文疏証』精読／中井履軒『老子雕題』精読／劉炫『孝経述議』精読／皮錫瑞『孝経鄭注疏』精読 など



伝統的に「インド哲学」(印哲)と銘打ってはいますが、研究対象は実はインドにも哲学にも限定されません。インドを中心に、ネパール、チベット、スリランカなどにも掛かる南アジア帯の古典文献をひろく研究しています。仏教思想とバラモン教哲学のふたつを研究の核としていますが、研究領域はこれらに留まらず、思想・宗教のほか、文学、法典、文法学、芸術論、医学など多岐にわたります。扱う文献の多くはサンスクリット語、パーリ語、古典チベット語などの古典語で書かれており、多言語の資料を駆使して古典文献を読み解きます。

教員の岩崎はインドの正統派哲学、とくにニヤーヤやミーマナーサー、パーニニ文法学で展開される学術的議論を得意とします。また、崔は仏教、とくにチベットで発達した仏教論理学と認識論の研究を専

門にしています。この2名により、幅広い領域の研究を指導できる体制を組んでいます。

研究方法としては、古典文献学の方法を中心としつつも、その枠に囚われないことを重視し、比較哲学、応用倫理、認知科学、文学理論などの視点も導入して新しいインド哲学研究を試みています。デジタル人文学の活用も推進しています。

インド哲学の研究では、国外の研究者とも連携して進めていくことが不可欠です。そのため、とくに大学院生には留学を推奨しています。渡航先としてはインドのほか、ドイツ、オーストリア、イギリス、アメリカなどが多く、それぞれの研究の方向性に応じて計画を立てます。

岩崎 陽一

教授

博士(文学)

インド言語哲学、形而上学、文法学

- 『言葉の「正しさ」をめぐる——インド新論理学派による言語情報の哲学——』(山喜房佛書林、2017)
- “Human Intellect and God’s Will in Navya Nyāya Semantics,” *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language*(Bloomsbury, 2020)

博士論文

Language and Interpretation in Mahāyāna Buddhist Tradition／サンスクリット詩学における文体理論／古典インド実在論研究／説一切有部思想の展開／初期ヴェーダーンタ学派不二元論の研究／古典ニヤーヤ学派における推理論の研究／Emptiness in the *Cūḷasūññasutta*／古代インドにおける女性仏教修行者の生活／瑜伽行派の思想展開／タイに伝わるパーリ語蔵外仏典の研究／『チャンドラ文法』の研究—仏教とパーニニ文法学との関係を中心に—／パーリ修辞学書 Subodhāṅkāra の研究—第4章「意味の修辞の理解」を中心に—

修士論文

ヴェーダーンタ学派の教義綱要書『アパロークシャ・アヌプーティ』の研究／『中論』第十章に対する諸註釈の比較研究／『シャーラダー・ティラカ・タントラ』におけるシンボリズムとヨーガ／『根本説一切有部律』「破僧事」における降魔成道説／Abhidharmakośabhāṣyaと註釈書における四念処の研究／インド文法学派における願望法語尾の意味／サーンキヤ学派における主宰神の研究—Yuktidipikāを中心に／ラトナキールティの他心論—多様不二論との関係を中心に／カーリダーサ著 Vikramorvaśiyam の研究／清弁の二諦説理解

講義題目

インド哲学概論／仏教概論／サンスクリット語／パーリ語／古典チベット語／インド哲学文献研究／初期仏典研究／中観仏教研究／唯識仏教研究／インド文学作品研究／パーニニ文法学研究／古代武術論研究／古典文献学入門／密教入門／叙事詩研究入門／形而上学研究入門／インド美学芸術論概説／祭事哲学概説／仏教認識論概説／言語哲学概説



映像学は、2017年4月の人文学研究科の発足とともに設置された分野・専門です。

映像の生産、流通、上映、表象、受容に関わる多様な側面を、歴史的・社会的・政治的・経済的・文化的・テクノロジー的・エコロジーの文脈を視野に入れながら、実証的・理論的に研究することを大きなヴィジョンとして掲げています。具体的な研究対象としては、映像批評理論、映画史、各国・地域映画、初期映画、越境映画、インディペンダント映画、映像文化(ジェンダー、エスニシティ、モダニティ、記憶、エコロジーなど)、ジャンル(ドキュメンタリー、アニメーションを含む)、スター、映画祭、観客、メディア産業、検閲、プロパガンダ、トランスメディア、デジタル映像、映像アーカイヴ、映像教育、テレビ、写真などが挙げられます。

映像学は国際的な環境にあるというのが1つの大きな特徴です。授業は、日本語だけでなく英語でも教えられています。教員は皆、海外での研究・教育経験が豊富であり、留学生もさまざまな国から来ています。超域文化社会センターや国際プログラム群(Global30)「アジアの中の日本文化」とも密接に連携し、海外の研究者たちと共同で研究を



進め、ワークショップやシンポジウムなどを共催しています。また、イギリスのウォリック大学とのコチュテルPhDプログラム(グローバル・スクリーン・スタディーズ)とも連動しています(p.39参照)。大学院生がこうした国際的な舞台で経験を積むことを重視しています。

藤木 秀朗

教授

Ph.D.

映像社会史、映画理論

- ・*Making Audiences: A Social History of Japanese Cinema and Media* (Oxford University Press, 2022).
- ・“Contested Screen of Energy: Gaia, the Commons and Infrastructure.” *Screen* 66, no. 1 (2025).
- ・*Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan* (Harvard University Asia Center, 2014).

馬 然

准教授

Ph.D.

映像文化論、トランスナショナル映画

- ・*Independent Filmmaking across Borders in Contemporary Asia* (Amsterdam University Press, 2019).
- ・「政府運営と民間が分離する中国」ミツヨ・ワタ・マルシアノ編『映像アーカイブ・スタディーズ』法政大学出版局 2025 年
- ・“Affective-Scape/ing in Zhang Lu’s Inter-Asian Quartet,” in Z. Zhang, D. Mukherjee, I. Paramaditha, and S. Lee, eds, *The Routledge Companion to Asian Cinemas* (Routledge, 2024).

博士論文

Animating Technological Acceleration: The Films of Ōtomo Katsuhiro/ The Idol Culture in 1980s’ Japan: Media, Body and Gender/ Tokyo, Global City of Cinema 1980-1995: Cultural Infrastructure and the Urban Imaginaries of Globalisation/ 何が日本のメディアミックスを可能にしたのか? —メディアミックスシステムとしての製作委員会方式の形成と変容/ Anime and Social Imagination: Media Fictions in Japan’s Age of Neoliberalism / A Study of Identity, Aesthetics and Politics in Sinophone Malaysian Cinema since the 2000’s/ Making Interlingual Meaning: Japanese Subtitles in English-Language Narrative Film

教員からのメッセージ

学部で異なる分野を専攻した方も受験可能です。授業訪問、研究室訪問はいつでも歓迎します。

小川 翔太

准教授

Ph.D.

映像文化史、表象文化研究

- ・*Routledge Handbook of Japanese Cinema*, co-ed. with Joanne Bernardi (Routledge, 2020).
- ・「宙づりになる非市民の遺産」ミツヨ・ワタ・マルシアノ編『映像アーカイブ・スタディーズ』法政大学出版局 2025 年
- ・“‘Zainichi Cinema’ in a Global Frame: Apple TV+’s Pachinko (2022) and the Cosmopolitan Middlebrow,” *Transnational Asia* 5, no.1 (2023).

修士論文

介入する公共圏としてのクイア映画祭：地方・オンライン実践にみる社会的空間の再構築／語りの視点からみる在日コリアン女性映像作家／90年代以後の日本ボクシング映画：男闘士の絆、女性ボクサー、敗北の表象を中心に／日本映画における死の表象／『無言日記』を中心とした三宅唱／Reconsidering K-pop Music Video/Lucy Liu’s Image in Hollywood Cinema／1970年代「ヒロイン・アクション」映画の再考／角川映画の予告編とメディアミックス／日本映画斜陽期における名画座の興行実践／「リモート映画」から再考する個人化するスクリーン文化／交渉空間としての中国「十七年映画」(1949-1966)／ニューメディア時代における日本アニメと中国／1930年代～1950年代の日本映画における戦争と女性



日本文化学は、学部生は所属しない大学院専担の講座である。地域や学問領域をまたいで多角的に日本文化を捉え直し、積極的に研究成果を社会に問うていく大学院生・研究者を養成している。とりわけ東アジア地域の関係性の中において日本文化の姿を捉え直す人材を育てていくことを目的とする点に特色がある。

講座の教員は、東アジアを視座とした日本近現代文学・文化研究、比較研究や表象文化論、ジェンダー研究、デジタル・ヒューマニティーズ、植民地文化論、出版文化論などを主たる研究領域としている。教員組織としての「日本文化学」には、他に英語で行われる「アジアの中の日本文化」プログラムを担当する教員も所属しており、連携しながら教



育研究を進めている。所属する学生は、博士研究員・博士候補研究員まで含めると総勢50名を超す大所帯であり、そのうち半数程度が留学生という国際的な講座である。

授業としては、通常の各教員のゼミに加えて、ティーム・ティーチングの授業があり、専門分野を超えた議論ができるよう配慮している。また講座の教育・研究活動の一環として人文学研究科附属超域文化社会センターが主催するシンポジウムやセミナーに、積極的に協力・参加している。このセンターには映像学、日本史専門の教員・院生も関わっており、交流が深い。常に日本の外からの視点や隣接分野の知見が交錯する、賑やかで開放的な講座である。

日比 嘉高 教授

博士(文学)

近現代日本文学・文化、移民文学、出版文化、デジタル・ヒューマニティーズ

- ・『ブライヴァシーの誕生 モデル小説のトラブル史』(新曜社、2020)
- ・『帝国の書店 書物が編んだ近代日本の知のネットワーク』(岩波書店、2025、和辻哲郎文化賞・一般部門)

岩田 クリスティーナ 教授

Ph.D.

近現代文学、「在日」文学

- ・2025. "Literature-Feminist Bodies of Fiction," in Andrea Germer and Ulrike Wöhr, eds, Handbook of Japanese Feminisms, Japan Documents.
- ・2024. "Writing back to the Capitalocene: Radioactive foodscapes in Japan's Post-3/11 literature," in Hannes Berghaller (ed.) Foodscapes of the Anthropocene, Peter Lang (co-authored with Aidana Bolatbekkyzy)

尹 正汐 准教授

博士(文学)

大衆文学、日中比較文学

- ・『社会派ミステリー・ブーム』(花鳥社、2023)
- ・"Representing the Silk Road: Literature and Images between China and Japan during the Cold War", in Humanities, 2023, 12(1).

博士論文

東日本大震災以後の「文学」における「当事者」性の研究／『女人芸術』の人々と中国一植民地の近代と女性作家の文化生産／ガラスのモダニズム 一日本文学におけるガラスの表象と身体・視覚性・想像力／Seiyu from recording booth to theater stage: a case study of Ad-Live as a seiyu-oriented project／日本近代文学における傷痍軍人表象／日本近現代文学における炭鉱表象の研究―生活者たちの表現をめぐる／戦後西洋文学者の日本訪問と文化交流、翻訳文化史研究／戦後日本における民話運動史の研究／清末中国の唱歌と明治期日本の唱歌の比較研究／在日朝鮮人女性の「表現実践」―自己回復と関係の再生をめぐる

教員からのメッセージ

日本文化学講座では、文学を中心とした日本文化研究に関心をもつ大学院生を広く募集しています。指導可能な領域は以下のとおりです。近現代の日本文学全般。ジェンダー批評や女性文学、植民地文学、出版文化にかかわるもの。比較文学、表象文化、日本文学・文化に関わるデジタル・ヒューマニティーズなど。



生まれた地域や国を離れ、異なる文化環境で暮らす人々は、年々増えています。同じ文化の人々に囲まれ、自分がどのような文化に帰属しているか考えたことのなかった移動者は、新しい地で生活をしているなかで、受け入れ社会の人々と接触し、共に働き、共に生活を営み、他文化の相手と結婚し、次第に自分のアイデンティティについて考え始めます。受け入れ社会の側でも、他者との接触を通じて社会関係は変容し、統合や排除をめぐる動きが生まれてきます。また、近代化、グローバル化、情報社会の到来に伴い、文化的規範、慣習、祭りなどが変容しはじめ、様々な新しい現象が生まれつつあります。

文化動態学という分野では、文化と社会がどのように変化していくか、移民、マイノリティの人々がどのように受け入れ国の人々、いわゆ

るマジョリティと接触しているか、文化と文化の交流が国際社会にどのような影響を与えているか、どういう時に個人や集団の活動がナショナリズムの高揚の原因になっているか、母国を離れ離散して住んでいる人々がどのように繋がっているかなどというテーマをはじめ、数多くのトピックを取り扱っています。

大学院の授業では様々な理論を学び、多くの文献、資料を読むことによって社会変容の諸側面をより深く理解することになりますが、それに限らず、自らインタビューを実施し、集めたデータを分析し、これまで誰も考えてこなかった問題に光を当てることにも挑戦できます。文化や社会の新しい現象の発見に参加してみませんか。

サヴェリエフ イゴリ 教授

博士(学術)

歴史学、文化人類学、移民研究

- ・「移民と国家―極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民」(お茶の水書房、2005)
- ・『白海における中国人一労働移民の歴史、1915-1919年』(ソユーズ・デザイン社、2017)
- ・Igor Savelliev & Natalie-Anne Hall(eds) Migration, Aging and Japan's Sustainable Society (Routledge, 2025)

鶴巻 泉子 准教授

修士(社会学) D.E.A.(Sociologie)

国際社会学、ヨーロッパ地域研究

- ・「テロリズムの表象」『日仏社会学年報』28 (2017)
- ・« Autonomie journalistique et résistance aux cadrages imposés », La subjectivité journalistique, Lemieux, C. (ed), Ed. de l'EHESS, 2010

博士論文

ウズベキスタンのコリョサラムの移住及びホスト社会における適応―ロシアと韓国における事例の比較研究／創られる『民族』：現代中国における民族政策とマイノリティ集団の変容―四川・雲南省ルグフ地域ナズ人集団を例に／現代中国都市部における回族女性に関する人類学的研究／名古屋華僑社会の歴史の変遷及び新たなコミュニティの形成と発展／アイスランドにおける中国系移民コミュニティの形成と発展―新たな経済活動によるネットワークの変遷に着目して／引揚者の歴史社会学／Reimagining Okinawa: Memory, Race, and Identity in the History of the Okinawan Diaspora in Argentina, 1945-1998／1990年代以降の日本社会における中国系移住者の生活戦略―東海地方の「中華料理人」によるネットワークの構築を中心に

修士論文

フランスにおける教育と「機会の平等」―パリ政治学院特別選抜制度の事例を通して／「満洲国」における被植民者への学校思想教育の分析―教科書内容と教育の実態から／モスクワにおける華商コミュニティ及びその活動空間―リュブリノ市場を中心に／「アルキ」を取り巻くスティグマへの一考 (Réflexion sur les stigmates entourant les harkis)／中国帰国者高齢者の異文化介護の現状と課題―介護の現場を中心に／日中における戦争記憶のあり方に関する比較研究―南京大虐殺と広島被爆を事例に／四川省における出稼ぎ労働者の世代間格差―四川省福来村を例として／回族と主流社会にとっての「清真」／ブラジル系第二世代の進路選択／日本華僑社会における伝統の再編―春節祭を中心に

学生からのメッセージ

授業では、学生・教員関係なく活発に意見を交わすため、物事の理解を深めると同時に、より多角的な視野を養うことができます。また、少人数ならではの密接なご指導をいただけるので、安心して研究に励むことができます(博士後期課程 升一亜海)。





ジェンダー学分野では、ジェンダーおよびセクシュアリティに関する教育、研究を行っています。ジェンダーは、生物学的性差であるセックスに対し、社会的・文化的に構築された性差やそれに基づく権力関係を指し、セクシュアリティは、性的欲望や、欲望の対象が異性に向かうのか同性に向かうのかを指す性的指向などを意味します。残念ながら学部ゼミはありませんが、2022年度に始まった新カリキュラムでは学部の選択必修授業(2年生以上対象)として「ジェンダー学概論」「セクシュアリティ学概論」が新たに開講されました。これらの授業で基礎を学んだ後には、大学院と同時開講の「ジェンダー・セクシュアリティ学演習」でより理解を深めることができます。一方、大学院には、上記の学部・大学院同時開講授業(大学院での授業名称は「ジェンダー・セクシュアリティ学基礎演習」)と、それに続く「ジェンダー学発展演習」「セクシュア



リティ学発展演習」、そして学位申請論文の指導を主とするゼミ(「修士論文演習」「博士論文演習」)が用意されています。

分野の院生は留学生や社会人を含み、研究テーマは下記、修了生の学位論文題目に明らかのように多岐に渡ります。研究科の再編に伴い、2022年度から新体制となり、またジェンダー研究は近年目覚ましい展開を遂げていることから、大学院受験を検討される方は、人文学研究科の大学院説明会(詳細は研究科ホームページで周知)等において、本分野で研究可能な学位論文のテーマや方法について、指導を希望する教員に確認されることをお勧めします。なお、修了生の進路は大学教員、海外の大学院への進学、一般企業や官公庁への就職など様々です。言わずもがなですが、本分野では研究に対する真摯な姿勢を重視しています。

松下(谷本) 千雅子 教授

博士(文学)

LGBT研究、クィア理論、セクシュアリティ論

- ・Tanimoto, C. & Miwa, K. (2021). Factors influencing acceptance of transgender athletes. *Sport Management Review*, 24(3), 452-474. DOI: 10.1080/14413523.2021.1880771
- ・Tanimoto, C. (2017). Who's afraid of the beast in the Jamesian closet? *Journal of Homosexuality*, 62(12). DOI: 10.1080/00918369.2016.1265354
- ・松下千雅子. (2009). 『クィア物語論-近代アメリカ小説のクローゼット分析』. 人文書院.

博士論文

「正常」な身体 of ゲシュタルト崩壊—西洋視覚文化におけるボディ・イメージとその歪み／1960年代以降ハリウッド映画における動物表象／ヘミングウェイ・テキストにおける身体表象分析—権力・棄却・パフォーマンス・ヴィティ／Cultural Translation and Representation of Mother-Daughter Relationships: A Study of Works by Maxine Hong Kingston, Amy Tan, Fae Myenne Ng, and Mei Ng／Fantasy at Play: Gender and sexuality in English-language Japanese video game fandoms／性を演じる—映画における異性装とジェンダー

修士論文

Chinese lesbians' social media usage and their life satisfaction／Online lesbian communities and cyber lesbianism in Mainland China／How do young Japanese gay men gain knowledge of safer sex? Using constructivist grounded theory approach／Outside the Olympic Rings: Non-binary gender in competitive sports events／クィア映画祭のエスノグラフィー：関西クィア映画祭を例に／BL 愛好者の消費と交流に関する質的研究

指導可能領域

ジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズムに関する特に以下の領域：クィア理論、LGBT 研究、スポーツ、スポーツマネジメント、社会調査、経済・労働・社会政策、フェミニスト経済学

新井 美佐子 准教授

博士(経済学)

経済・社会領域に関するジェンダー

- ・ホークスワース著、新井美佐子他訳(2022)『ジェンダーと政治理論—インターセクショナルなフェミニズムの地平』明石書店
- ・新井美佐子(2022)『ケアとジェンダー——フランスを事例にして』公益財団法人東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会編『ジェンダー研究が拓く知の地平』pp.251-275、明石書店
- ・新井美佐子(2023)『経済学におけるジェンダーの視点』名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ『GRL Studies』Vol.5、pp.68-71。

ヘイグ・エドワード 教授

Ph.D.(Linguistics)

批判的言説分析

- ・『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析』(共著、日本メディア英語学会談話分析研究分科会訳、くろしお出版、2012)
- ・“A study of satire in a seventeenth century pamphlet,” *Studies in Media and Society* 9(2017).

金 相美 教授

博士(社会情報学)

メディア・コミュニケーション論、ニューメディア論

- ・“Pathways to Youth Political Participation: Media Literacy, Parental Intervention, and Cognitive Mediation,” 72nd ICA Conference, Paris, France, 26-30 May 2022 (共著)
- ・『日本メディアの実現と理解』(共著、韓国言論振興財団、2020)

指導可能領域

批判的言説分析、カルチュラル・スタディーズ、ファンダム研究、パンデミック社会論、メディア・コミュニケーション論、ソーシャルメディア論、出版メディアの受容研究、日本視覚文化、消費文化、大衆文化論、日本の戦時大衆文化、メディアと文化における表象の政治、オンライン・ジャーナリズム、東アジア出版文化、体系機能言語学、近現代家族と社会、フェミニスト&クィア研究、近世イギリスのニュース文化、日本近世文学、情報格差、デジタルヒューマニティ



ダイバーシティ論

大学院

<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/about/about-sub2/> ●●●

私たちの周りには、性別、世代、国籍、障害の有無、価値観、経験、スキルなどにおける様々な「違い＝ダイバーシティ（多様性）」が存在しています。この多様性にあふれる社会において、個人の尊厳を大切にしようという人権意識の広がり、現代の確かな潮流となっています。さらに、グローバル化の進展や労働力人口の減少に直面する今、多様な背景を持つ人々が知恵を出し合い、協働する仕組みを築くことは、社会の持続可能性や創造的発展性をもたらす重要な課題でもあります。

企業や行政、教育の現場においても、ジェンダー・ギャップの解消、仕事と育児・介護・治療との両立支援、多文化共生の政策への取り組みなど、様々な点からダイバーシティの実現が目指されています。しかし、ダイバーシティが組織や社会の力へと昇華されるプロセスには、個人の価値観や無意識のバイアス、集団や社会のアンバランスな構造、

政治や制度面の障壁といった複雑な要因が存在しています。それらの課題を解決する学術的知見は未だ十分ではなく、本分野はまさに今、理論の構築が急務となっているフロンティアです。

本分野ではダイバーシティに関わるあらゆる課題を対象として、ミクロレベルの「個人の心理や行動」、メゾレベルの「社会の構造や文化」、マクロレベルの「政治や制度」という多層的な観点を中心に、多角的なアプローチを展開します。特定の学問領域に固定されることなく、時代とともに変容する社会的ニーズに即して分析手法を柔軟に統合し、客観的なエビデンスに基づく考察を深めていくことを目指します。学際的な知を活用しながら、「真の共生」を実現するための確かな論理を共に導き出しましょう。



加藤 容子 教授

博士(心理学)

多様なライフキャリア、ワークライフバランス、組織・個人の心理的支援

- ・加藤容子(2024), 組織・集団の見立てに活用する産業・組織心理学と組織コンサルテーション 産業ストレス研究, 31(2), 155-163
- ・加藤容子(2022), ライフキャリアの多様性(pp.85-96) 吉田あけみ(編)ライフキャリアを考えるための論点10 ミネルヴァ書房
- ・加藤容子・三宅美樹(編)(2020), 「産業・組織心理学一個人と組織の心理学的支援のために」ミネルヴァ書房

左高 慎也 特任助教

博士(法学)

政治学、政治制度論、政治理論、ジェンダーと政治

- ・左高慎也(2026)『制度論からのジェンダー平等：フェミニスト制度論から政治理論をつくる』勁草書房
- ・左高慎也(2022)『「ジェンダーと政治」研究におけるインフォーマルな制度の位置：フェミニスト制度論を手がかりとして』『ジェンダー研究』24, 59-85
- ・左高慎也(2022)「フェミニスト制度論と合理的選択制度論の両立に向けた理論的考察：『女性を加えてかき混ぜる』アプローチを越えて」『経済社会とジェンダー』7, 124-148

指導可能領域

ダイバーシティに関する以下の研究領域

ライフキャリア、ワークライフバランス、個人の心理と組織行動、組織開発／ジェンダーダイバーシティ、社会調査、制度分析、国際比較／政治学、政治制度論、政治理論、民主主義

三枝 麻由美 准教授

博士(社会学)

ジェンダー平等、アカデミアにおける女性の過小代表性、国際比較、制度分析

- ・三枝麻由美・山内星子・佐藤剛介(2024), 「女性研究者が少ない理由に関する統計分析」『ポリモルフィア』9巻, pp.84-91
- ・三枝麻由美(2020), 「ジェンダー平等推進に向けたアプローチの変容－フランスとスウェーデンにおけるジェンダー平等の歩み」『国際ジェンダー学会』18巻, pp.107-124
- ・Saegusa, Mayumi. 2009. "Why the Japanese Law School System was Established: Co-optation as a Defensive Tactic in the Face of Global Pressures." *Law and Social Inquiry* 34(2): 365-398

日本史学

学部

大学院

<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/about/about-sub2/jphis.html>

「日本史」という言葉を聞いたとき、何を想像しますか？豊臣秀吉、幕末の動乱、源平合戦や卑弥呼など、多くの人は中学校や高校で勉強した「日本史」を思い出すのではないのでしょうか。では、その勉強の際に「なぜ」と思ったことはありませんか？「なぜ豊臣秀吉は天下統一を成し遂げることが出来たのだろうか」、など。「日本史学」は日本の歴史の中に隠れている「なぜ」を見つけ、掘り下げ、その答えを導き出していく学問です。日本史学研究室では、2・3年生の間は、日本史の中の「なぜ」を考えるために必要な様々な「方法」を学びます。授業のうちの、講義科目では、研究の基礎となる文献・古文書などの史料の読み方や、担当する教員の専門分野に沿って歴史学の考え方を勉強します。また、演習科目では、学生が順番に割り当てられた史料について調べ、

調べたことについて報告・ディスカッションを行います。高校までの自身の授業とは全く違い、担当の史料に則して自分の興味・疑問を納得のいくまで調べ、教員や参加学生にぶつけることのできる絶好のチャンスです。また「フィールドワーク」といって、歴史の舞台となった現地を実際に歩くことで、空間的・視覚的に歴史を勉強する授業もあります。4年生になると、今まで積み重ねてきた勉強を土台に、今度は自分の興味・関心に基づいた「なぜ」について考えていくことになります。「卒業論文」は、その「なぜ」という問題に対して自分が考えた「答え」の総まとめです。日本史研究室には、古代から近現代までの各時代の教員が揃っていますので、自分が選んだ時代を専門分野とするそれぞれの教員の下で密度の濃い研究をすることができます。

古尾谷 知浩 教授

博士(文学)

日本古代史

- ・『律令国家と天皇家産機構』(塙書房、2006)
- ・『平安時代の建築・手工業生産と家産制』(塙書房、2025年)

河西 秀哉 教授

博士(歴史学)

日本近現代史

- ・『近代天皇制から象徴天皇制へー「象徴」への道程』(吉田書店、2018)
- ・『皇室とメディアー「権威」と「消費」をめぐる150年史』(新潮社、2024)

博士論文

通信使・燕行使と日本近世／日朝関係と対馬藩－日朝接触の様相を中心に／長崎唐通事集団の研究／大正・昭和戦前期の日本における航空思想の普及／幕末期萩藩の藩政改革と「西洋化」／南北朝内乱における寺院軍事活動の研究／日本海軍における志願兵「募集」と地域／帝国日本の形成と日清・日露戦争における感染症問題／近世日朝関係と対馬藩の裁判役－日朝外交折衝における裁判役の役割を中心に－／参勤交代旅行の研究／中世後期の東寺供僧学衆と東寺長者／律令国家の形成と飛鳥宮の研究／室町時代の神祇と政治／平安時代前期における地方支配の研究－地方の「反経制宜」と中央による国司統制

教員からのメッセージ

2026年度の日本史学研究室の在籍生数は、学部2年生12人、3年生16人、4年生15人、博士前期課程12人、同後期課程17人、ほか若干名です。秋の研究室旅行では、愛知県(2020-2022-2023年度)、岐阜県(2024年度)、滋賀県(2025年度)などにでかけています。

斎藤 夏来 教授

博士(歴史学)

日本中世史

- ・『五山僧がつなぐ列島史－足利政権期の宗教と政治』(名古屋大学出版会、2018)
- ・『徳川のまつりごと－中世百姓の信仰的到達』(吉川弘文館、2023)

佐藤 一希 准教授

博士(文学)

日本近世史

- ・『近世天皇家の宮中法会と寺院・門跡』(『日本史研究』756、2025年)
- ・『近世後期の皇位継承と天皇・女院』(思文閣出版、2026年)

修士論文

日本古代の官人評価制度－国司功過を中心に／色紙から見た日本古代の天皇家産制について－文書料紙の生産・収取・使用の点から／『熱田の深秘』の伝播と受容－中世・近世の写本に注目して－／近代的政治空間創出の歴史的過程－洋学知・国家意識・政治参与の検討から－／戦国期の菅浦と近江浅井氏／植民地朝鮮における皇民化－一九四〇年代の女性と子どもに対する宣伝物を中心に－／愛知県における大学紛争の歴史的過程／「御押」をめぐる公権力－六角氏を中心に－／織田権力における側近の動き－菅屋長頼の検討を中心に－／「日記」から見る台湾人アイデンティティに関する考察－皇民化政策を例として－



東洋史学研究室では、東は朝鮮半島から西はアナトリアまで、広くアジア諸地域の歴史を研究の対象としています。

特に中国・東南アジアに関しては、それぞれ専門の教員がおり、最新の研究動向に触れつつ専門的な勉強をすることが可能ですが、これに限らず、広くアジアの諸地域の歴史に関心を持つことが望まれています。

卒業論文・修士論文の研究テーマも、中国は古代から現代の共産党時代までさまざまであり、また中国以外ではタイ近代史、ベトナム近代史、インド近代史、西アジア中世史と、非常に広い分野にわたっています。学生が自分でテーマを見つけ、研究を進めていくことが奨励されているのです。

授業は、中国史・東南アジア史の演習、すなわち漢文史料・英文資料・タイ語史料などを読み、討論することに多くの時間を割いています。空理空論ではなく、史料的事実にもとづいて歴史を構成する歴史学にとって、史料読解と分析はその根源とも言えるべきものです。学生の皆さんはこうした演習を通じて史料の読みかたを学び、さらに史料から引



きだした事実にもとづき、当時の社会や人間のありかたについて討論していくことになります。

もちろんこうした外国語史料を読み解いていく、というのは簡単なことではありませんが、最初からすらすら読める、などという人はいたためがありません。本当の初歩から、一步一步進んでいきますので、心配しなくても大丈夫です。

加藤 久美子 教授

博士(歴史学)

東南アジア史、タイ族地域の歴史

- ・『盆地世界の国家論——雲南、シブソパンナーのタイ族史』(京都大学学術出版会、2000)
- ・“Sipsongpanna's Perception of Other Tai Principalities in 1837: The Tai Principalities in Present-day Northern Thailand and Other Principalities in Sipsongpanna's Surrounding Area”『年報タイ研究』16(2016)

川口 洋史 特任講師

博士(歴史学)

東南アジア史、タイ近世史

- ・『文書史料が語る近世末期タイ——ラタナコーシン朝前期の行政文書と政治』(風響社、2013)
- ・“Siam-Vietnam Relations during the Reign of King Rama I: Burma and the Qing in Regional Diplomacy.” *The Journal of the Siam Society* 113(2) (2025)

博士論文

雍正時期における雲南統治の限界について(中文)／在日華僑の学校教育と自己認識・世界認識の構築—19世紀末から1980年代まで—／明清時期の洱海地区における「白人」の社会身分とアイデンティティの変遷についての検討／清前期雲南の地域社会—高其倬・鄂爾泰による改土帰流とその後の地方統治をめぐって—／清代長江中上流域の塩政における官僚の運用／“真诗”论的形成—理学時代の诗论发展过程(中文)／鄂爾泰の西南統治—其民族观念及对策(中文)／ラタナコーシン朝前期シャムの政治構造—政権構成と文書処理システムを中心として—

教員からのメッセージ

近年は中国からの留学生が多く、授業中のやりとりにも中国語がまじることが少なくありません。中国語の文献を読むという時、ネイティブの人とともに学ぶというのは、なかなか得がたい機会かもしれません。



西洋史学という学問は歴史学の一分野で、時代的には人類の起源から現在までを、空間的にはヨーロッパとヨーロッパ人が進出していった先の南北アメリカも研究教育の対象に含めています。歴史学は人類が時間のなかでたどってきた道筋を巨細に明らかにすることにより、人間存在の一段と深い理解に寄与することを目指す科学です。科学である限り、厳密な方法と厳密な論理が欠かせません。また事実立脚して、議論を進めていかなければなりません。そこで最も重要なのは、そこから「事実」を汲み出す水源となる史料を読み解く力です。

欧米が対象文化圏ですから、どうしても欧米の言語が史料を読むためにも、研究論文を読むためにも必要です。中世や古代に関心があれば、古代ギリシア語やラテン語などの古典語を勉強しましょう。

わが研究室は5名のスタッフがそれぞれ古代史、中世史、近代史、現代史というふうに時代全体にまたがっていて、構成の面でバランスがとれているばかりでなく、教育・研究においても高い水準にある点では日本の大学でも指折りと自負しています。

歴史を学ぶことのメリットは、生きている現在の世界だけでなく、過



ぎ去った時代の言動にも接することによって養われる、人間と社会についての視野の広さにあります。ですから、自分が特に興味をもって勉強したいと考えている時代だけでなく、人類史のトータルな認識を得るために、すべての分野に関して基礎的な知識を身につけるよう努力してください。

周藤 芳幸 教授

博士(文学)

古代ギリシア史

- ・『ナイル世界のヘレニズム——エジプトとギリシアの遭遇』(名古屋大学出版会、2014)
- ・『古代ギリシア——地中海への展開』(京都大学学術出版会、2006)

和田 光弘 教授

博士(文学)

アメリカ近代史

- ・『アメリカは、いかに創られたか——レキシントン・コンコードの戦い』(NHK出版、2024)
- ・『植民地から建国へ——19世紀初頭まで(シリーズ アメリカ合衆国史①)』(岩波新書、2019、韓国語版、2024)

大野 普希 特任講師

修士(文学)

古代ギリシア史

- ・「パウサニアス『ギリシア案内記』における都市景観と歴史叙述—テゲアに関する記述を中心に—」『史林』107-3(2024)
- ・「ローマ支配下のポリスとポリス認識」『古代文化』76-1(2024)

博士論文

6-8世紀におけるローマ教会・教皇の支配者観／中世後期フリブルールにおける市民／ビザンツ帝国後期における皇帝文書の形式・機能・伝来／子どもと学校の世紀:18世紀フランスの社会文化史／多言語地域におけるナショナリズムと言語・民族問題／第二帝政期ドイツにおける女性の社会活動と家族扶助／七-九世紀フランク国家の王国法廷と「プラキタ」

修士論文

ヘレニズム期ロドスにおける市民と外国人の社会的結合関係／ローマ帝政前期のギリシア諸都市における皇帝崇拜／ヴィクトリア時代後期の絵本／帝国都市リュベックの成立／アメリカ独立戦争における補給の問題について／西ドイツの歴史政策と追悼記念碑／ヘレニズム時代のコスにおけるディカスタイ／アイトリア連邦のシュンキア政策／17世紀神聖ローマ帝国における週刊新聞にみられる地理的世界観の広がり

内田 綾子 教授

博士(学術)

アメリカ現代史

- ・『アメリカ先住民の現代史——歴史的記憶と文化継承』(名古屋大学出版会、2008)
- ・“Searching for Indigenous Alliances,” *The Japanese Journal of American Studies* 23 (2012)

加納 修 教授

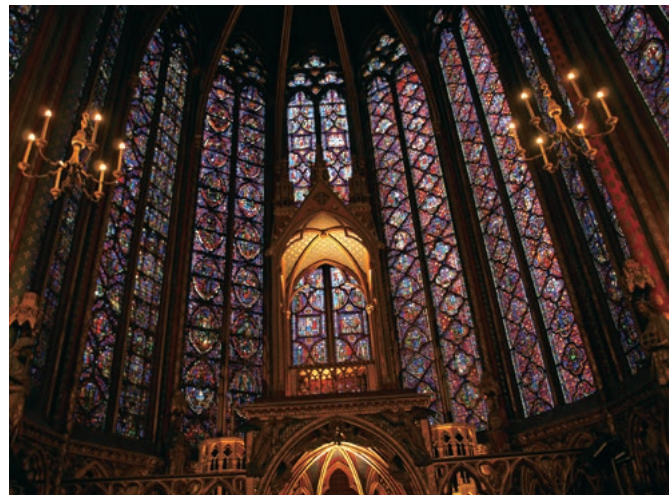
博士(歴史学)

西洋中世史

- ・*Entre texte et histoire. Études d'histoire médiévale offertes au professeur Shoichi Sato*(共編、de Boccard、2015)。
- ・『フランス史研究入門』(共著、山川出版社、2011)

講義題目

西洋史概論／西洋史入門演習／西洋史講義／西洋史演習／西洋史学卒業論文演習／西洋史研究／西洋史基礎演習／西洋史発展演習／西洋史学修士論文演習／西洋史学博士論文演習



インターネットの発達やスマートフォンの普及により、私たちのコミュニケーションにおいては、画像・映像がとても大きな比重を占めるようになりました。様々なSNSでは画像のやり取りだけで意思疎通が図られる場合も見られます。

現代の社会ではイラストや写真や動画などが私たちのまわりを常に取り囲み、数多くのイメージがあふれかえています。それらは知らず知らずのうちに私たちのものの見方や考え方を規定する力を持っています。よく出来た商業広告は、私たちの購買意欲を刺激し、社会に流行現象を生み出します。

美術史学という名称からは、油絵や彫刻など古典的な美術のみを扱っているように思われるかもしれませんが、今や美術史学は、古典的な造形美術の研究のみならず、イメージの力全般を考察する学問へと広がりを見せています。

もちろん美術館で展示されるような古典的な美術品の歴史を実証的に研究するのが基本であることは変わりませんが、現代のイメージあふれる社会とそこに生きる人々に、学問や展覧会がいかなる提言をできるのかをも常に考えています。ですから、これまでの卒論では、古典のみならず、漫画やアニメ、映画などあらゆる視覚表現の問題が取り扱われてきました。さらには、教会建築や万国博覧会など、作品を生みだし、それを発信する場の研究などもあり、すそ野は広がっています。

百聞は一見に如かずという言葉もあります。イメージの不思議な力に気付いた時、美術史学への第一歩はすでに踏み出されているのです。

伊藤 大輔 教授

博士(文学)

日本美術史

- ・『鳥獣戯画を読む』(名古屋大学出版会、2021)
- ・『肖像画の時代』(名古屋大学出版会、2011)

博士論文

現図曼荼羅の成立に関する研究：空海請来本系にみる図様改変の問題を中心に／世紀転換期のグスタフ・クリムトにおける身体表現と素描：ウィーン大学、講堂の天井画を中心に／コレッジョ作、パルマ、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂の天井画及び壁面装飾の再解釈／ブッサンにおける語りと寓意／ヴェネツィア、サン・ジョヴァンニ・クリストモ聖堂の装飾プログラム：16世紀初頭に設置された祭壇彫刻・祭壇画を核として／アジア的視点から見た日本の不動明王の受容と展開／八部衆像の成立展開に関する研究／ヴァシリー・カンディンスキー「隠されたコンストラクション」／中国における5～6世紀の仏教彫刻の図像学的研究／アントワヌ・ヴァトーの雅宴画における彫刻について

教員からのメッセージ

卒論もいわゆる美術作品以外に多様なテーマに取り組んでいます。漫画における時空間の表現—『宝石の国』からみるコマ割りのシステム(漫画)／戦後日本の前衛美術と社会(万博)／レオ・レオニについての考察(絵本)など。



考古学は、人工物や人の残した痕跡を実証的に研究することで、当時の社会や文化を解明し、人類史を再構成する学問です。遺跡を発掘し、出土した遺物を分析して考古学的事実を正確に把握し考察を重ね、新しい歴史像を再構築していきます。

考古学の研究対象は非常に幅広いです。地球上に存在する人類の痕跡、つまり、遠い過去の時代はもちろんのこと、今この瞬間の直前までをも含みます。

そのため、考古学の研究では、考古学の基礎的視点・方法に習熟することがまず重要です。加えて、対象となる遺跡や遺物を正しく理解するためには、歴史学や文化人類学などの人文科学の知識、文化財科学や情報科学、三次元計測、自然地理学などの知識も必要になります。また、近年技術の発展に伴い、考古学でも資料の記録・分析、その活用方法は今まで以上に多様化しています。

このような状況に対応し、授業では伝統的な考古学を基礎として最新の研究方法や動向もとりいれています。また、考古学専門には講義や演習のほかに実習という授業があります。これは遺跡の発掘技術や遺物の整理技術を習得するための授業で、本専門ではもっとも重要な授業として位置づけています。論文の作成にあたっては、課題を発見し、課題に対する作業仮説をたて、資料をあつめて作業仮説を検証し、結論をみちびくように指導をしています。

梶原 義実 教授

博士(文学)

日本考古学(歴史考古学)

- ・『国分寺瓦の研究』(名古屋大学出版会、2010)
- ・『古代地方寺院の造営と景観』(吉川弘文館、2017)

博士論文

古代東アジアにおける須恵器と金工品からみる地域間交流／埋蔵文化財保護手法の開発・研究とその実践／唐・五代期窯業技術の展開からみた日本施釉陶器生産の成立に関する研究／8～9世紀の猿投窯における須恵器生産体制／出土木製品からみた原始集落の生業と生活／メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究／東アジア先史時代の植物質編物の研究／東海地方における縄文・弥生時代の貝塚／縄文時代における身体装飾の研究／縄文時代における精神文化遺物の研究／メソアメリカ先古典期文化の研究／中世瀬戸窯の研究／韓半島における原始・古代の漁撈文化／東アジアにおける窯業技術の発展史と技術交流史の研究

教員からのメッセージ

教員は日本考古学を専門としていますが、考古学という学問は日本のみに限定されるものではありません。教員が日本考古学の成果や方法論を外国に発信するとともに学生には外国の考古学を勉強することもすすめています。

中川 朋美 准教授

博士(文学)

日本考古学(先史考古学・骨考古学)

- ・『カタチの由来、データの未来』(勁草書房、2024)
- ・『文化進化の考古学』(勁草書房、2017)

修士論文

織豊期瓦生産の導入と展開—製作工程を踏まえた考察—／集落動態からみる弥生時代後期の丘陵上集落の展開と要因—岐阜県西濃地域から中濃地域を中心に—／近世播鉢の江戸遺跡における需要／メソアメリカ南東部の先古典期土偶にみる生活習慣に関する基礎的研究／西三河地域の古代寺院における瓦生産／日本統治時代の台湾における日本式瓦の生産と流通／弥生前期から古墳前期の伊勢湾周辺地域における墳墓の地域性と階層性／縄文時代の東海・北陸における石器石材流通／古代日本における陶硯の使用実態研究／古代伊勢地域における仏教の受容と地域の動向／古典期前期メソアメリカ南太平洋岸地域におけるテオティワカン様式土器の受容／矢作川流域における4—9世紀の集落／平安時代後期の濃尾地域における灰釉陶器生産



文化人類学は、世界の多様な社会と文化、思想をフィールドワークと民族誌、資史料にもとづいて精緻に理解するとともに、人類史的な比較の視点から、人間の本質の解明をめざす学問です。

異文化や過去の社会では、現在の私たちが常識と考えていることが常識ではない場合があります。それでは、人類の思考、社会のあり方、法律、道徳、経済、宗教、芸術などには何らかの普遍性があるのでしょうか。百聞は一見に如かず、具体的なフィールドワークや文献調査をとおして、これらの問題を考えてみましょう。こうして、異文化と自文化を行き来し、空間と時間を超えて、「人類」という大きなスケールで、生物の一種でもあるヒトとは何か、社会とは何か、文化とは何か、人間は何

をどのように思考してきたのか、といった問題を考えることを人類学的思考と呼びます。それは、自分が暮らす社会、そして世界の情勢を洞察する確かな眼を養ってくれるはずです。

その思考の出発点となる題材は、私たちの身の回りにあふれています。衣食住、結婚と家族・親族、社会構造、お祭りや地域の伝統文化、神話、芸能、コミュニケーションといったおなじみの題材はもとより、私たちが直面している社会問題や環境問題も新たな題材を次々に生み出しています。文化人類学は、人文学の中でもっとも幅が広く、もっとも奥行きが深い学問分野です。異なる文化、社会、思想への関心はもちろん、幅広い知的好奇心をお持ちの皆さんを私たちは歓迎します。

佐々木 重洋 教授

博士(人間・環境学)

文化人類学

- ・『仮面パフォーマンスの人類学—アフリカ、豹の森の仮面文化と近代』(世界思想社、2000)
- ・『聖性の物質性—人類学と美術史の交わる場所』(共編著、三元社、2022)

東 賢太郎 教授

博士(文学)

文化人類学

- ・『リアリティと他者性の人類学：現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』(三元社、2011)
- ・『脱観光化の人類学：かわりゆく観光と社会のゆくえ』(共編著、ミネルヴァ書房、2025年)

博士論文

現代人形劇における〈遣い〉と生命／社会貢献活動と宗教性—東日本大震災後の災害ボランティアにおける「利他行ネットワーク」の形成事例から—／明恵の宗教思想の展開と発展／食文化と国家イメージの結びつきをめぐる「想像」—日本で作られる「韓国」食品と料理の普及を事例に—／日本仏教の戒律伝播と律僧の事績に関する研究—近世初期を中心として—／旅の土産品と真正性—高度経済成長期以降の日本における菓子土産の地域性をめぐって—／被爆者のトラウマにおける時空性と社会性—医療人類学的研究—／古武道における伝承の歴史人類学的研究—モノ・ナマエ・ワザの過去と現代—／現代都市部における産育をめぐる習俗と信仰の研究—愛知県名古屋市の事例を中心に—／新たな聴衆層の誕生—1980年代日本におけるマーラーブームの事例から—／中世絵物語における画中詞の表現と機能／寛饒からみる院政期の王権と仏教—宗教文芸研究の射程から—／日本における動物犠牲の狩猟文化的意義

修士論文

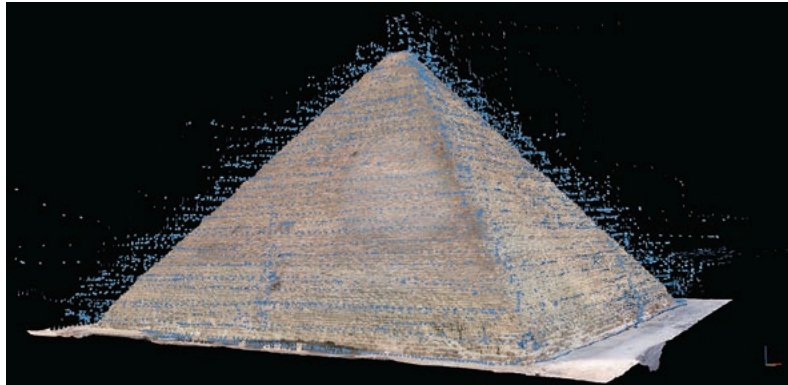
新古原開設と尾張／日韓の現代アートと芸術祭—国際芸術祭あいちと光州ビエンナーレの事例から—／花祭における「神鬼の舞」の継承—舞を実践する担い手の身体性に着目して—／発達障害からみる近代人間観の再考—苦悩と分断の人類学—／庭師の剪定における自然の時間性／フィリピンにおける葬送儀礼の変容に関する人類学的研究—北部山岳地帯サガダにおけるHanging Coffinsの事例—／現代日本社会における教会コミュニティの存在意義と持続性—瀬戸永泉教会の実地調査を通して—／英国社会における学校教育とジェンダー／成人発達障害者の「生きづらさ」をめぐる研究／在日コリアンの民族意識に関する文化人類学的研究—民族団体への参加と名のりから—

講義題目(学部)

文化人類学概論／文化人類学入門演習Ⅰ・Ⅱ／文化人類学入門実習Ⅰ・Ⅱ／文化人類学講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ／日本思想文化講義／文化人類学講読Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ／文化人類学実習Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb／文化人類学演習Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb／文化人類学卒業論文演習a・b

講義題目(大学院)

文化人類学基礎演習Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb／文化人類学発展演習Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb／文化人類学修士論文演習a・b／文化人類学博士論文演習a・b／文化人類学研究



© The Trustees of the British Museum (CC-BY-NC-SA-4.0; <https://cdli.earth/artifacts/393748/reader/181591>)



2026年、名古屋大学人文学研究科に「文化遺産学」という新たな学際領域が誕生しました。人類が長い歴史の営みの中で残してきた文化的所産は、有形・無形を問わず、私たちに過去の叡智を語りかけると同時に、未来を創造するための重要な指針となるものです。本分野・専門では、これらを「文化遺産」として総体的に捉え、地球規模で探究します。

研究の対象は多岐にわたります。日本の寺社に残されたテキストや、シルクロードを行き交った美術や文化の交流、そして粘土板に刻まれた西アジアの歴史など、地域や時代を越えた多彩な遺産と向き合います。さらに、壮大な歴史を有する古代エジプトの文明なども、その重要な探究対象の一つです。

研究手法においても、従来の歴史学、文献学、美術史、考古学といった枠組みを柔軟に横断します。厳密な文献読解や実地でのフィールドワークといった伝統的な手法を重んじつつ、現代的な課題にも応えるため、情報科学との融合も図ります。デジタル・ヒューマニティーズの視点を取り入れ、デジタルアーカイブの構築や3D計測による分析など、最先端の技術を用いた保存・活用や、新たな価値の創出についても模索していきます。

多様な専門を持つ教員に加え、将来的にはさらに広範な歴史・考古学領域との連携も視野に入れています。過去への深い洞察力を養い、文化遺産の価値を次代へとつなぐ、意欲ある学生の皆さんをお待ちしています。

河江 肖剰 教授

博士(歴史学)

エジプト学、ピラミッド、3D計測

- ・“Structural Analysis of Pyramids: Insights from the Giza 3D Survey Project” Special Edition: Joint Indonesia-Japan Research on International Conference, Surabaya: Universitas Negeri Surabaya 7 (2024)
- ・「ギザのスフィンクスの文化的記憶」(周藤芳幸(編))『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社、2022年)

影山 悦子 准教授

博士(文学)

イスラーム以前の中央アジア文化史

- ・『ソグドのパベンジセント遺跡宮殿址で出土した壁画について』(『シルクロード研究論集』1、東洋哲学研究所、2023)
- ・近本謙介・影山悦子(編)『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』(臨川書店、2023)

教員からのメッセージ

文化遺産学では、たとえば、次のような研究テーマに取り組むことができます。古代エジプトのピラミッド研究、3D計測やAIを駆使したデジタル・ヒューマニティーズ、地方のピラミッド周辺の住居址発掘。楔形文字文書を用いた歴史研究、アッシリア帝国史、王室書簡研究。イスラーム以前の中央アジア文化史、東西文化交流史、中央アジア諸国における文化遺産の保存・活用。中世顕密仏教研究、仏教思想史、日本宗教儀礼研究、説話文学研究、寺院聖教研究、宗教テキスト学研究。



朝、一杯のコーヒーを飲みながら新聞に目を通す。そのコーヒーは、グローバルに展開する資本主義のシステムを通じて地球の裏側の国々とつながっています。一方、戦争や政変や危機や災害を報じる記事の陰には、私たちとよく似た無数の家族や恋人たちが住んでいることでしょう。身近な出来事を広い文脈と結びつけて考える能力、またそれとは逆に、広い世界の出来事を身近な問題として考える能力のことを、社会学的想像力と呼びます。

社会学研究室のスタッフは、グローバル化する現代社会におけるローカルコミュニティの価値を過疎地に寄り添って探究したり、家庭と市場におけるジェンダー間の不均衡や不正義とそれに抗する市民社会の運動を分析したり、仕事と福祉のあり方とあるべき姿を福祉レジームの国際比較と未来を見通す構想力で追求したり、経済と社会の多様な

相互作用や労働市場で生じる格差と不平等を理論的かつ経験的に分析したり、地域の担い手となる移民二世世代のキャリア形成に注目することで多文化共生の将来を展望したりしています。どの研究も、現代社会学の最先端を切り拓くものばかりです。

社会学は、人々のあいだの「関係」に着目して社会現象や社会問題を解明しようとする学問です。その研究領域は、家族、教育、産業、労働、地域、福祉、環境、災害、政治、経済、宗教、科学技術、メディアなど多岐にわたります。社会学研究室では、ゼミや講義を通じて基礎理論を批判的に学ぶとともに、調査実習や卒業研究を通じて社会の現実にも迫る技法を体得します。お互いに議論し刺激しあう仲間のいる、活気に満ちてあたたかい研究室です。

室井 研二 教授

博士(社会学)

地域社会学、災害社会学

- ・『都市化と災害』(大学教育出版、2011)
- ・『震災復興と開発——リスク配分の不均衡と環境変動』(東信堂、2026)

山根 純佳 教授

博士(社会学)

ジェンダーの社会学、再生産・ケア労働論

- ・『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』(勁草書房、2010)
- ・『ケアする私の「しんどい」は、どこからくるのか——見えないケア責任を語る言葉を紡ぐために』(共編著、勁草書房、2025)

上村 泰裕 准教授

博士(社会学)

福祉社会学、比較社会政策論

- ・『福祉のアジア——国際比較から政策構想へ』(名古屋大学出版会、2015)
- ・『岩波講座社会学第9巻——福祉・社会保障』(共編著、岩波書店、2024)

福井 康貴 准教授

博士(社会学)

経済社会学、社会階層論

- ・『歴史のなかの大卒労働市場——就職・採用の経済社会学』(勁草書房、2016)
- ・『社会的企業の日韓比較——政策・ネットワーク・キャリア形成』(共編著、明石書店、2024)

SONG Gijung 助教

博士(社会学)

国際社会学、エスニシティ論

- ・「ブラジル人集住地域における第二世代の文化変容とキャリア形成——集合財文化資本と社会関係資本に着目して」『移民政策研究』17(2025)

博士論文

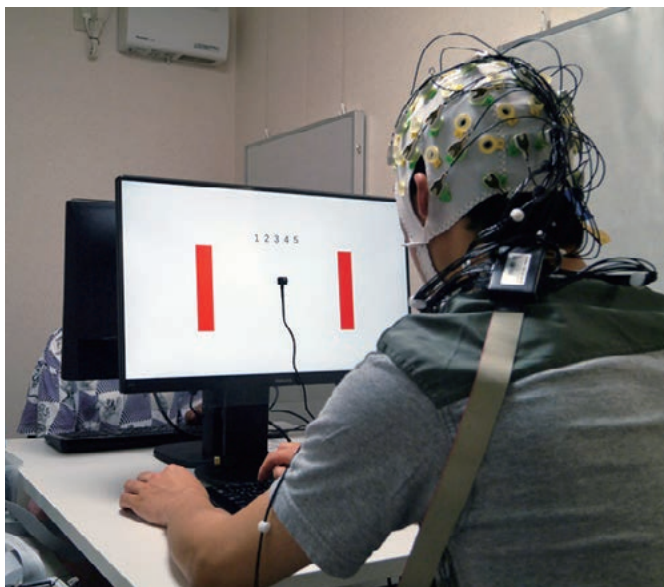
原発の「負の遺産」——台湾第一原発立地地域の履歴効果とスティグマに着目して／生業の遺産化に関する社会学的研究——三重県鳥羽市の海女漁を事例として／長期的災害復興におけるコミュニティ・ガバナンス——東日本大震災の津波被災地域を事例として／農業環境公共財の持続性をささえる社会的条件——宮城県における環境保全米の普及過程にみる複数の合理性／食産業のグローバル化とフレキシビリティ——中国・上海における寿司業の現地化と技能・労働力形成／障害者と健常者の連帯的労働の形成過程——障害者運動団体「わっぱの会」を事例に

修士論文

気候変動政策の国際比較——比較福祉国家論の枠組に基づく分析／日本におけるFridays For Futureの展開——担い手のコミットメント過程に着目して／非正規雇用から正規雇用への移動における階層間不平等——雇用関係とジェンダーに着目して／女子受刑者の社会的排除・包摂プロセス——女子刑務所の就労支援に着目して／離島における地域おこしと社会的ネットワーク——北海道礼文島を事例として／個人間オンライン取引における信頼形成——Airbnbの民泊を事例として／身体性の贈与を可能とするメカニズム——献体登録者への調査に基づいて

卒業論文

現代におけるライフスタイルスポーツの価値——都市のスケートボーダーの実践に着目して／中小企業のワークライフバランス——男女雇用機会均等との関連に着目して／部活動改革と地域連携——学校と総合型地域スポーツクラブの社会的交換を中心に／アロマンティック・アセクシュアルを生きる——恋せぬわたしのアイデンティティ／フリーランサーの職業生活と社会関係／廃棄物処分場と地域社会——なぜ愛岐処分場では反対運動が起こらなかったのか／パキスタン人移民によるエスニック・ニッチの創出——富山県射水市「イミズスタン」の調査から



心理学は、人間の意識や行動を決定する条件やその仕組みを科学的に分析する学問です。ですから心理学は、哲学などの人文科学、社会学などの社会科学、さらには生理学などの自然科学のすべてと関係をもつ幅広い研究領域です。その中でも、私たちの研究室では、とくに、脳や自律神経の活動と心の関係を調べる生理心理学、乳幼児や児童・青年を対象にして心の発達過程を調べる発達心理学、他者や集団に対する認知や行動を追究する社会心理学、知覚・記憶や思考の成り立ちを分析する認知心理学、脳のかたちや活動を画像化して心に迫る認知神経科学など、基礎的な分野を中心とした研究・教育が行われて

います。このような研究では、実験、観察、調査などの方法を用いて「事実」を集めます。「私はそう思うから…」とか「誰それがそう言っていたから…」ということではなく、あくまでも客観的な事実(データ)でモノを言わなければならないからです。そのためには、事実を集めるためのしかるべき方法(実験法、観察法、調査法など)をきちんと理解しておく必要があります。そこで、当分野ではこれらの研究法の基礎を習得するための講義や演習の授業が数多く組まれています。また、授業以外の場所でも、文献講読や共同実験など、教員と大学院生・学部生の間の緊密な関係に基づいて研究が進められています。

大平 英樹 教授

博士(医学)

生理心理学、感情心理学、認知神経科学

- ・『感情心理学・入門 改訂版』(有斐閣、2024)
- ・“Predictive processing and emergence of the human mind,” *Psychologia*, 65 (2023)

磯村 朋子 准教授

博士(理学)

身体性認知科学、発達心理学

- ・“Direct gaze enhances interoceptive accuracy,” *Cognition*, 195 (2020)
- ・“Electrocardiographic activity depends on the relative position between intimate persons,” *Scientific Reports*, 14 (2024)

博士論文

ハイパースキャンfMRIを用いた言語コミュニケーションにおける共有の神経基盤の基礎的研究／Elucidation of the cognitive computational process underlying the behavior of pursuing the unprofitable targets／The computational characteristics of avoidance learning in psychopathy／Reinforcement learning in humans: Rethinking psychologically plausible model-free and model-based algorithms／Prolonged effects of acute stress on decision-making／Effect of emotional arousal at memory encoding on the P300-based concealed information test／Dual modulation mechanism of cognitive control for the environmentally adaptive behavior

教員からのメッセージ

当心理学教室では、実験心理学を基盤としながら、生理学、行動科学、神経科学等の多様なアプローチを取り入れています。既存の心理学の枠組みを超えて「こころ」の謎を科学的に解き明かすことに情熱を持てる学生を歓迎します。

修士論文

心周期と眼球運動のカップリングの検討／二個体同時脳波計測を用いた刺激特徴への共同注意の神経基盤の検討／リアルタイムで観察できる他者の視線が行動と意思決定に与える影響／画面越しの評価者の存在形態の違いが認知課題遂行中の注意に及ぼす影響：脳波による検討／Effects of interoceptive accuracy on timing control in the synchronization tapping task／Predictive processing in time perception／スマートフォン依存傾向とスマートフォン関連刺激に対する注意バイアスならびに抑制制御能力の関係：脳波による検討／Electrophysiological evidence for changing or keeping decision after social conflict



「そこに山があるから」登るのだという登山家の言葉があります。それはきっと、山を愛する人々が共有する、一種のロマンなのでしょう。では、なぜそこに山があり、山の向こうに何があるのでしょうか。地理学はそんな素朴な思いを、空間・地域・場所といった考え方を通じて体系的に捉える学問です。身近な地域に対する複雑な感情からグローバルに展開する環境問題まで、地表上のあらゆる現象を「空間」というプリズムによって鮮やかに映し出す。それが地理学なのです。

地理学教室では、空間的な見方に関する理論を学ぶ講義や国内外の文献を読みこなすための文献演習や講読が行われます。また、実践的な手法を身につける実習に特色があります。例えば、大量の地域データの処理法を学ぶ地理情報システム実習、気がつかなかった大地

高橋 誠 教授

博士(地理学)

コミュニティ研究、災害研究

- 『大津波を生き抜く』(共著、明石書店、2012)
- 『スマトラ地震による津波災害と復興』(共編、古今書院、2014)

横山 智 教授

博士(理学)

文化地理学、東南アジア地域研究

- 『資源と生業の地理学 (ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第4巻)』(編著、海青社、2013)
- 『納豆の起源 (NHKブックス 1223)』(NHK 出版、2014)
- 『サステイナビリティ―地球と人類の課題―』(共編、朝倉書店、2018)
- 『納豆の食文化誌』(農山漁村文化協会、2021)
- 『世界の発酵食をフィールドワークする』(編著、農山漁村文化協会、2022)

今里 悟之 教授

博士(文学)

民俗地理学、農山漁村研究

- 『農山漁村の「空間分類」―景観の秩序を読む―』(京都大学学術出版会、2006)
- 『長崎平戸の宗教地誌―キリシタン・カトリック・在来信仰―』(九州大学出版会、2024)
- 『平戸の島々はなぜ宗教が多彩なのか―島の地域誌―』(古今書院、2024)

卒業論文(2024年度)

岐阜県高山市における観光客の特性と行動パターン／町並み保存運動における住民と行政の役割／東海地方における大型小売店の多店舗展開／近隣空間における児童および保護者のリスク認識／愛知県半田市の畜産業における牛ふん堆肥の地域外流通／富山市の通所介護に見る公的供給の地域性／商店街活性化に寄与する「市」の現代の特徴／滋賀県高島市知内における「魚のゆりかご水田プロジェクト」の展開と環境アイコンとしてのニゴロブナ／信州紬産地の衰退下における企業の対応／愛知県南知多町篠島における住民の信仰と場所の変容



の素顔が見えてくる地形観察の現地実習(巡検)などです。2、3年次の夏に出かける4泊5日の野外実習では、実地調査に挑みます。その経験や反省をもとに、4年次にはいよいよ卒業論文に取り組みます。図書館の書庫でほこりまみれになったり、ボーリング調査にでかけて泥だらけのまま眠りこんでしまったり、山村調査のおみやげに蜂の子を持って帰ったり……。こうした体験をつんだ卒業生達は、学界、官界、マスコミなど、様々な世界で活躍しています。

「空間」を通じて、環境をとともに考える諸君を、私たちは歓迎します。地理学分野・専門の詳しい情報については、以下をご覧ください。
<https://www.geog.lit.nagoya-u.ac.jp/>

伊賀 聖屋 准教授

博士(地理学)

経済地理学

- 「能登地域におけるワイン専用種ブドウの供給体系の生成」『経済地理学年報』63(2017)
- 「オルタナティブフードシステムと生産空間―インドネシア東ジャワの環境保全型エビ養殖を事例に―」『農業と経済』87-5(2021)

齋藤 仁 准教授

博士(理学)

自然地理学

- “Landslides triggered by an earthquake and heavy rainfalls at Aso volcano, Japan, detected by UAS and SfM-MVS photogrammetry”, *Prog. Earth Planetary Sci.* 5 (2018)
- “Rapid vegetation recovery at landslide scars detected by multitemporal high-resolution satellite imagery at Aso volcano, Japan”, *Geomorphology* 398 (2022).

松岡 由佳 助教

博士(文学)

社会地理学

- 「地域社会における精神障がい者の受容過程―愛媛県南宇和郡愛南町を事例として―」『地理学評論』88(2015)
- 「英語圏の人文地理学におけるメンタルヘルス研究の展開」『地理学評論』93(2020)

阿部 隆博 助教

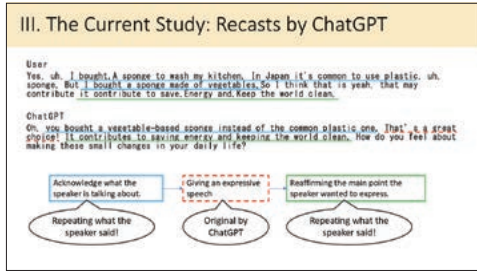
博士(理学)

自然地理学、リモートセンシング

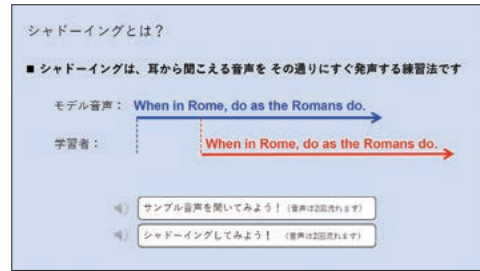
- “Winter speed-up of quiescent surge-type glaciers in Yukon, Canada”, *The Cryosphere* 9(3) (2015)
- “Surface displacement revealed by L-band InSAR analysis in Mayya area, Central Yakutia, underlain by continuous permafrost”, *Earth, Planets and Space* 72:138 (2020)

卒業論文(2025年度)

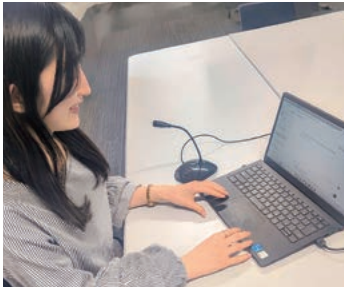
衰退する新興住宅地における子育ての環境／愛知県豊橋市における公共交通機関と誘導施設の利便性評価／多言語使用地域における言語景観／地産地消の視点からみた学校給食用牛乳の選定／木曽駒ヶ岳における過去50年間のハイマツの分布変化と地形条件／兵庫県尼崎市における漫画・アニメ聖地巡礼行動の変遷／名古屋市における街路樹維持管理方策



■修士論文研究例:ChatGPTとの英会話の効果について



■修士論文研究例:シャドウイングの指導法の効果について



担当教員紹介	エドワード・ヘイグ 教授	Ph.D.
	批判的言説分析	
	鈴木 駿吾 准教授	Ph.D.
	第二言語スピーキング、言語テスト	
	村尾 玲美 准教授	博士(学術)
	第二言語習得論	

修士論文

The Effects of Explicit Instructions on Prosody in Second Language Shadowing Training: A Comparative Analysis of Intonation and Pauses／The Use of Generative AI in Promoting English Conversation Activities: Focusing on the Effects of Recasting／Comprehension, Production, and Acquisition of Grammatical Morphemes in Japanese Junior High School Students: Focusing on Third Person Singular -s, Plural -s, and Possessive -s／Correlation Between Writing Ability and Writer／Reader Visibility Based on A Japanese EFL Learner Corpus／Japanese English Learners' Generalization of Linguistic Patterns: Empirical Verification of the Theoretical Foundation of Data-Driven Learning／Developmental Stages of Noun Phrase Complexity in Essays of Japanese EFL Learners and Native English Speakers／A Study of Cohesion and Coherence in Japanese Learners' Argumentative Writing as Compared to Native Speakers': Insight into the Lack of Naturalness in Written English／*Jane Eyre* in Japanese／An Examination of the Character of Elizabeth Bennet in Japanese Translation of *Pride and Prejudice*／*A Study in Scarlet* in Meiji Japan／Time Travel with Unconsciousness in *Tom's Midnight Garden*／A Study of *Cranford*: Prejudice and Humour in Class, Gender, and Nationality／A Study of *The Nether World* by George Gissing: Leisure Activities and their Influence on the Working Class

指導可能領域

英語教育、ICTを利用した英語教育、英語習得研究、英語教材開発、英語指導法研究

言語学・文化研究プログラム



Kimi Akita

Associate professor

Edward Haig

Professor

Dylan McGee

Associate professor

Koji Miwa

Associate professor

Remi Murao

Associate professor

Grib Dina

Lecturer

Chikako Nagayama

Associate professor

Yoshikazu Oshima

Professor

Junko Yamashita

Professor

Eiko Yasui

Associate professor

Wei Zeng

Lecturer



The Japan-in-Asia Cultural Studies Program (JACS)

「アジアの中の日本文化」プログラム



■ 文学や様々な映画、映像を通じて日本文化を勉強します。

Kristina IWATA-WEICKGENANNT

岩田 クリスティーナ 教授

Hideaki FUJIKI

藤木 秀朗 教授

MA Ran

馬 然 准教授

Dylan McGEE

ミギー ディラン 准教授

Tristan GRUNOW

グルーノ トリスタン 准教授

Eiko YASUI

安井 永子 准教授

Chinami OKA

岡 知奈実 助教

The Japan-in-Asia Cultural Studies Program (JACS) undergraduate and graduate programs offer students the opportunity to explore the rich and complex relations between Japan and other East Asian countries. With particular emphasis on cultural history, cinema and screen cultures, and modern literature, the curriculum is designed to help students master general academic skills such as critical thinking, analytical reading, and effective communication skills while acquiring a broad perspective on Japanese culture in Asia and specialized knowledge in one or more discipline. JACS aims to produce active and productive members of global society, and to play a key role in facilitating cultural exchange and friendship between Japan and the world. In addition, the graduate program offers opportunities to interact with internationally distinguished scholars from different countries at international conferences, workshops, and other events organized regularly in Nagoya and locations around Japan and the world. A good third of our graduates have advanced to MA and PhD programs abroad and in Japan, while the majority found jobs in a wide range of fields, including government services and large companies both in Japan as well as their home countries.

JACSの公式ホームページ: <https://www.nagoya-jacs.com/>

特別コース

分野横断的な学びの推奨

文学部では2022年度より、分野・専門(研究室)や教育プログラム、学繋の枠をさらに超えた幅広い学びを支援するために、「一般・個別言語学」「近現代日本学」「文化資源学」という学知横断型の3つの特

別コースを設置し、単位取得のモデルを提示しています。希望する学生はそれぞれの分野・専門(研究室)に所属して自身の専門分野を究めるとともに、特別コースの指定科目をあわせて履修することで、卒業時に認定証が交付されます。

種も含め、学芸員以外の職種で社会に出て行く学生が、学芸員資格をもち、その知識を社会の諸分野で活用してもらうためのコース(「学芸員資格をもつ公務員・社会科教員」コース)を設けており、各自の専門や興味に応じて選択できます。

日本史学・美術史学・考古学の学生はもちろんですが、文学や哲学、環境学など、それ以外の分野・専門を専攻する学生にも広く履修してもらうことで、文化遺産について社会全体で考えていくことができるようになることを射程に入れつつ、このコースは設置されています。



いるかの解明が進んでいます。言語の分析手法を学び、自ら分析できるようになることで、私たちは言語全般や個々の言語を、俯瞰的に捉えることができるようになるでしょう。

文学部の様々な分野・専門のうち、日本語学・英語学・ドイツ語ドイツ文学・ドイツ語圏文化学・フランス語フランス文学・中国語中国文学の各分野・専門では、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、中国語の特徴を学ぶことができます。また、言語学分野・専門では、個別の言語を超えた言語全般の捉え方(すなわち、一般言語学的な視点)を学ぶことができます。一般・個別言語学特別コースでは、これらのうちの複数の分野・専門の科目を横断的に履修します。その際に、所属する分野・専門以外の教員から科目履修などについて助言を受けられることも、本特別コースの特徴です。

このような分野横断的な履修により、個別言語への深い理解と一般言語学的な視点の両方を身に着けたり、複数の言語の理解を深めたりすることができるようになるでしょう。そのような学びを通じて「言語のスペシャリスト」に近づくことが、本特別コースのねらいです。

近現代日本学特別コース

近現代の日本とは、いま日本に住む我々のもっとも近い過去であり、目の前で向き合っている現在そのものです。近くにあるからなんとなく知っているように思え、まさにいま立ち会っているからよくわかっていてる気がする。しかし、現実には多面的です。そして過去の歩みも、複雑で屈曲に富むものでした。

「近現代日本学特別コース」は、こうした直近の日本、現在の日本について学術的に考えようというプログラムです。経験的に知っていること、高校までの学校教育や受験で習ったことを、あらためて具体的な歴史資料に向き合い、文学表現の細部に分け入り、映像作品の画面に目をこらしながら、再検討していきます。

「近現代日本学」という学問領域があるわけではありません。特別コースの特徴は、学問分野の横断性です。履修生は、歴史学、文学、映

像学など、関連する分野について自分自身の関心に従いながら横断的に学ぶことにより、幅広く、複眼的に近現代の日本を捉えられるようになります。また、G30のJapan in Asia Cultural Studies担当教員とも連携しており、英語による日本研究の授業も履修・聴講できます。「近現代日本学特別コース」の教員が、履修生の所属講座の教員と連携しながら、卒業論文についての補助的なアドバイスも行います。

自分自身の手で歴史を語り、文学を語り、映画を語る面白さを、近現代日本の姿を再発見する喜びを、どうぞ体感して下さい。



学芸員養成課程

名古屋大学文学部で取得できる資格の一つに学芸員資格があります。学芸員とは、博物館法で登録博物館に必置とされている専門的職員で、博物館(美術館、動植物園なども含まれます)における資料の収集、保管、展示、調査研究および教育普及など、博物館の事業の専門的な事項をつかさどります。この資格を取得するためには、所定の博物館学関連科目の単位を修得して、大学を卒業する必要があります。具体的に習得しなければならない単位は、生涯学習概論、博物館概論、博物館経営論、博物館資料論、博物館資料保存論、博物館展示論、博物館教育論、博物館情報・メディア論(以上2単位)、博物館実習(3単位)という、9科目19単位となります。

実際に学芸員として現場で働くには、学芸員資格に加え、各専門分野に関する知識や調査研究能力が必要です。人文系の博物館の守備範囲は概ね考古、文書・典籍、美術・工芸、民俗の各分野ですので、それに関わる分野・専門を選び、専門性を深めることが学芸員への近道となるでしょう。皆さんが志望する博物館によっては大学院前期課程修了以上の専門性が要求される場合もあり、大学院への進学も頭の片隅に置いておいてください。

2022年の博物館法改正により、博物館はそれまでの社会教育に加え、文化観光の一翼を担うこととなり、行政における博物館の位置づけが高まりました。公務員を志す方にとっても、文化観光推進法に基づく拠点計画及び地域計画の策定や、文化財保護法に基づく文化財保存活用地域計画の策定等に将来関わる際には、学芸員養成課程で学んだことと専門分野の研究はきっと役に立つに違いありません。

また、博物館が回想法やセラピーなど社会的処方場、社会の保健室としても注目を受け始めるなど、博物館への社会の期待は増大しています。本学部では、学芸員資格に関連する副専攻プログラムも設けておりますので、幅広い分野・専門の方にご活用いただければと存じます。本学を卒業、修了した多数の学芸員の方々現場で活躍していますので、皆さんもぜひ後が続いてください。

名古屋大学-ウォリック大学PhDコチュテル・プログラム(グローバル・スクリーン・スタディーズ)

Nagoya-Warwick Co-Tutelle PhD Programme in Global Screen Studies



NAGOYA UNIVERSITY

WARWICK THE UNIVERSITY OF WARWICK

名古屋大学担当教員

藤木 秀朗 Hideaki Fujiki

映像学分野・専門

馬 然 Ran Ma

映像学分野・専門

長山 智香子 Chikako Nagayama

メディア文化社会論分野・専門

小川 翔太 Shota T. Ogawa

映像学分野・専門

ウォリック大学担当教員

次のウェブサイトをご参照ください。

<https://warwick.ac.uk/fac/arts/scapvc/film/staff/>

名古屋大学大学院人文学研究科は、2019年10月に、英国のウォリック大学映画テレビ研究学科との間で、映像学を専門にした博士後期課程の共同学位プログラムを発足させました。名古屋大学-ウォリック大学PhDコチュテル・プログラム(グローバル・スクリーン・スタディーズ)と名付けられた本プログラムは、この分野では世界でも稀有な、画期的かつ革新的な国際学位プログラムとなっています。

本プログラムに入学した大学院生は、名古屋大学またはウォリック大学を主大学として3年ないしは4年で博士論文を(英語で)完成させることが期待されます。この間、学生は、両大学の主指導教員と定期的に(主としてオンライン)面談を行い、指導を受けます。また、2年目には副大学に1年間に在学することとなり、名古屋大学を主大学とする学生の場合は、日本の大学とは異なる環境で授業を聴講したり研究集会に参加したりする機会が得られ、それにより世界の第一線で活躍するイギリス・ヨーロッパなどの大学の研究者たちや大学院生たちと交流を深めることができます。将来的に、東アジアとヨーロッパを架橋しながら映像学ないしはそれに関連する分野で国際的に活躍できる人材を育てることが、このプログラムの最大の目的です。より具体的には、本プログラムは、とりわけ次の点で参加学生の能力向上に役立つように設計されています。

- ・国際性に根ざした質の高い学術的・社会的経験を積むこと
- ・二つ以上の異なる国・地域の環境や映像文化に関わりながら学修・研究すること
- ・映像文化の国際的な性格を踏まえた研究課題に取り組むこと
- ・多様な方法論と広い視野をもったさまざまな研究者と交流すること
- ・二つ以上の異なる国・地域に対応できるコミュニケーション能力を養うこと
- ・将来国際的な場で活躍するための技能を身につけること

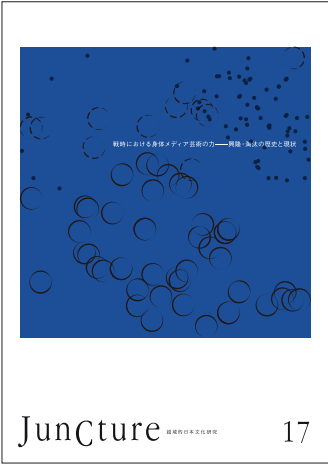
問い合わせ先も含め詳しくは、次のウェブサイトをご覧ください。
<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/en/gss/gss-top/>

人類文化遺産テキスト学研究センター



周藤 芳幸 教授
梶原 義実 教授
佐々木 重洋 教授
伊藤 早苗 准教授
影山 悦子 准教授
コンラード・マルクス 准教授
川本 悠紀子 准教授
吉田 早悠里 准教授
郭 佳寧 特任准教授
大野 普希 特任講師
井上 隼多 助教

超域文化社会センター



飯田 祐子 教授
河西 秀哉 教授
星野 幸代 教授
サヴェリエフ イゴリ 教授
小川 翔太 准教授
グルーノ トリスタン 准教授
鈴木 真 准教授
愛葉 由依 助教

人文学研究科は、2014年4月に21世紀COEおよびGCOEによるテキスト学の拠点形成の成果をもとに、「人類文化遺産テキスト学研究センター」(CHT)を立ち上げました。本センターは、人類が残してきたあらゆる文化遺産を対象に、実践的な人文学の横断的研究プラットフォームの構築を行っています。

2024年4月1日より本センターが改組され、人類文化を構成する4つの基幹領域として、「宗教遺産領域」「物質文化領域」「視覚文化領域」「文化人類学領域」を設定し、CHTのこれまでの活動の継承・発展を目指しています。また、これらの基幹領域を文理融合型研究で相互に結び付け、より高次の学問的・社会的諸課題に対応できるプラットフォームを構築するための融合部門として、「アーカイブ部門」「保存修復部門」「情報科学部門」「テキスト部門」を新設し、機動的かつ先鋭的な研究を積極的に推進しています。

本センターでは、宗教遺産の多様性と普遍性の学問的追究および、文化遺産の永続的な保全や活用の手法とそれが社会に与える影響についての検討を、喫緊の社会的・世界的課題と位置づけ、自然科学、保存科学、情報科学、文献学、社会情報学などとの多分野連携でその課題解決を実践していきます。そして、若い世代にも文理共創的学問領域の魅力を広めるために、大学院生向けに「文化遺産学研究」の授業を提供しています。

超域文化社会センター (Center for Transregional Culture and Society, TCS) は、旧文学研究科附属の日本近現代文化研究センター (2008年10月～2013年3月)、「アジアの中の日本文化」研究センター (2013年4月～2018年3月)で行った日本近現代文化研究・東アジア関係学を継承し発展させながら、さらに広い視野で最先端の人文学研究を推進すべく、2018年4月に発足しました。TCSのミッションは、地球規模で喫緊の課題となっている社会・環境に関する諸問題に対して根源的な観点から向き合うことです。そのために、人類の歴史と人間の営みについてこれまで人文学研究で培われてきた深い洞察と広い知見を踏まえつつ、社会科学・自然科学の協力も得ながら、国・地域を超えた視点から歴史、芸術的想像力、思想、文化的実践を捉え直し、その知見を実践知へと発展させることを目指します。これに向けて、TCSは積極的に国際的共同研究を進め、国際シンポジウムやセミナーを開催します。大学院生の皆さんには、そうしたイベントが共に学び合い、コミュニケーション能力を高める場となるよう、企画・運営にも参加できる機会を提供しています。また、海外の大学と大学院生研究交流集会を共催することで、院生の皆さんが国際的な舞台で研究発表を行い、海外の研究者や院生たちと交流できる場もつくっています。TCSは、人文学の視点から国際社会へ貢献することとともに、大学院生の皆さんが将来グローバルに活躍できるための支援に努めています。

人文知共創センター



中村 靖子 教授 岩崎 陽一 教授

鄭 弯弯 講師
博士(文化情報学) テキストマイニング、機械学習
・“Text length requirements for stable and genre-sensitive lexical diversity measurement,” *Cogent Arts & Humanities* 12(1) (2025)
・“A shadow-based framework for label noise detection and data quality enhancement,” *Decision Analytics Journal*, 15 (2025)

共通 各学繋には、分野・専門という枠組みの外で学繋の共通領域を担当する教員がいて、博物館学、電子テキスト学、文学、民俗学、歴史学などのさまざまな専門領域で研究し、専門科目や共通科目を受け持っています。授業や研究の相談にも積極的に応じています。

言語文化学繋

李 澤熊 准教授
博士(文学) 現代日本語学、認知言語学、日本語教育、日韓対照言語学
・「現代日本語における意図性副詞の意味研究－認知意味論の観点から」(単著、ひつじ書房、2023)
・「日本語の意味研究の新たな扉を開く－意味分析の方法と実際」(単著、開拓社、2020)
担当授業：日本語文法研究 など

グリブ・ディーナ 准教授
博士(日本語教育学) 日本語教育、異文化コミュニケーション
・On the sustainability of Virtual Cultural and International Exchange Events in Higher Education. *UNESCO Observatory E-Journal Multi-disciplinary Research in the Arts*, 9 (2023)
・「初級日本語教科書における登場人物の多様性への配慮に関する一考察」『言語の研究』13号(2024)
担当授業：Japanese Culture and Communication など

超域人文学繋

甘 靖超 准教授
博士(学術) 民俗学、文化人類学、食生活学
・「中国村落の婚姻儀礼におけるモチ米食文化とその機能——江蘇省蘇州市古里鎮S家の事例」『生活学論叢』25(2014)
・「中国江南のモチ米食文化とその機能」『食生活科学・文化、環境に関する研究助成・研究紀要』30(2017)
担当授業：文化動態学研究Ⅱ など

ブルンバーク・フレデリック 准教授
Ph.D (Comparative Literature), J.D. 詩と詩学、法と文学
・“Before Law and Literature: Law or Literature,” *Yale Journal of Law & the Humanities* 35.4 (2024)
・“The Praise of Folly and the Limits of Satiric Licence,” *Erasmus Studies* 39.2 (2019)
担当授業：比較文学・文学理論など

英語文化学繋

トムキンソン・フィオナ ゲール 准教授
Ph.D. English Literature, Philosophy
・“Elizabeth’s Pious Pilgrimage: or the Ghost in the Garden,” *Women: A Cultural Review* 28 (2017)
・“Ishiguro and Heidegger: The Worlds of Art,” *Kazuo Ishiguro in a Global Context* (Routledge, 2015)
担当授業：英米文学研究Ⅱ など

人文知共創センター(Humanity Center for Anthropocenic Actors and Agency: AAAセンター、<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/aaa/>)は、2022年度JSPS 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業学術知共創プログラムに、研究課題「人間・社会・自然の来歴と未来——「人新世」における人間性の根本を問う」(代表：中村靖子、JPJS00122674991)(略称「人新世」AAAプロジェクト)が採択されたことを機に設立されました。このプロジェクトは、三十年、五十年先の未来を見据え、新しい価値を創発する未来の人文学を目指すものであり、人文学のさまざまな分野、ならびに社会科学、自然科学系の諸科学の研究者らをメンバーとする五つの研究班により構成され、各研究班の班別会議、班を超えた特別企画、全体集会定例会を常時開催し、さまざまな組み合わせで緩やかに連携しつつ、研究活動を行っています。2025年度からは海外の研究者7名を研究参画者に迎え、これまで国際会議2回、国際シンポジウム3回、国際ワークショップ3回、などを開催してきました。AAAプロジェクトの研究成果としてAAA叢書の刊行を開始し、第1～第3巻まで刊行しました。2026年4月23日には、心理構成主義の立場に立つ感情理論で著名なりサ・フェルドマン・パレット氏を迎えたワークショップを開催します。センターの研究活動については、随時センターのウェブサイト(<https://a3hsn.org>)をご覧ください。



文献思想学繋

重見 晋也 准教授
文学修士 フランス文学・哲学、デジタル・ヒューマニティーズ
・*Concordance du «Roman de Renart» d’après l’éditions γ* (2001).
・“Quelles Sont les Conditions de L’organisation des Savoirs Humains? Dialogue entre Vannevar Bush, Theodore Nelson et Michel Foucault,” *Études Digitales* (2016)
担当授業：電子テキストⅠ など

アヴェラネダ・モルガン 准教授
Docteur en Littérature française 19世紀文学、報道の歴史
・*Madame de Staël, De la littérature*, Avellaneda (Morgane) et Frighetto (Auréli). Atlande, 2024, 200p.
・“Que faire après le *Génie du Christianisme*? Chateaubriand : la création d’une “posture” singulière dans le *Mercur de France* », in *Chateaubriand : nouvelles perspectives critiques*, dir. Bercegol (Fabienne), Glaudes (Pierre), Roulin (Jean-Marie). Classiques Garnier, Paris, 2020, p. 41-55.
・“Les “correspondances privées” dans la presse de la Restauration, des rééditorialisations mensongères », le 31 mai 2022. Congrès Médias 19 - Numapresse, au Centre culturel canadien, [en ligne], *Médias19*.
担当授業：フランス語・フランス文学 など

曾 煒 講師
修士(文学) 数学哲学、科学哲学、分析哲学史
・Lakatos’ Quasi-Empiricism Revisited, forthcoming, *Kriterion-Journal of Philosophy*
・Picture versus Language: An Investigation on Wittgenstein’s Mathematical Generality, *Contributions of the 40th International Wittgenstein Symposium*, Vol.1 (2017)
担当授業：Philosophy of Mind and Language (G30 LCS) など

歴史文化学繋

鶴見 泰寿 教授
博士(歴史学) 博物館学、日本古代史・歴史考古学
・「古代国家形成の舞台 飛鳥宮」(新泉社、2015)
・「蘇我氏を掘る」(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、2016)
・「東大寺の考古学」(吉川弘文館、2021年)

石川 寛 准教授
博士(歴史学) 日本近世・近代史、史料学、地域史
・「古文書・古絵図で読む木曾三川流域」(風媒社、2021)
・「すごろくで学ぶ安政の大地震」(風媒社、2021)
担当授業：文化資源学演習Ⅱ など

助教

三田 昌彦 助教

文学修士 インド中世史

・『岩波講座世界歴史4 南アジアと東南アジア ～15世紀』(共著、岩波書店、2022)

・“Land-Grant Charters of Fifteenth to Seventeenth Centuries Rajasthan: Changes from the Early Medieval Style” (Ishikawa Kan (ed.), *Aspects of the Literary Sources in South Asian Historical Studies*, Tokyo: The Toyo Bunko, 2025)

担当授業: 東洋史研究Ⅳ など

中川原 育子 助教

文学修士 中央アジア美術史、仏教美術史

・『全訳 六度集経 仏の前世物語』(共著、法蔵館、2021)

・『シルクロード・キジル石窟壁画の材料・技法の研究』(日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(B)海外、課題番号:24401021、研究代表者:佐藤 一郎)(共著、2016)

担当授業: 人文学基礎演習Ⅲなど

伊藤 伸幸 助教

博士(歴史学) 新大陸の考古学

・『メソアメリカ文明ゼミナール』(監著、勉誠出版、2021)

・『中米の初期文明オルメカ』(単著、同成社、2011)

担当授業: 人文学基礎演習Ⅲなど

井上 隼多 助教

博士(歴史学) 日本考古学・博物館学

・“Deep learning-based morphological classification of ceramics: A case study of 3D point cloud analysis for Sue ware, Japan”, *Journal of Archaeological Science* 187 (共著、2026)

・『猿投窯研究における歴史叙述と歴史観：1950年代から1960年代にかけての展開』『考古学研究』71-1(2024)

李乃琦 特任助教

博士(文学) 言語学、仏教文献学、デジタル・ヒューマニティーズ

・『一切経音義古写本の研究』(単著、汲古書院、2021)

・『一切経音義全文データベースの構築と研究』(分担執筆、『デジタル学術空間の作り方—仏教学から提起する次世代人文学のモデル』文学通信、2019)

国際化推進室



曾 煒 講師

文献思想学繋共通

グリブ・ディーナ 講師

言語文化学繋共通

黄 潔 特任助教

博士(地域研究) 民俗学・文化人類学、地域研究

・「政策移動に関する村落の風水伝説と実践—近現代中国におけるトン族の事例から—」(『旅の文化研究 研究報告』No.27、2017)

・「中国南部におけるトン族の親族組織の再考」(『アジア・アフリカ地域研究』第19-2号、2020)

愛葉 由依 助教

博士(文学) 文化人類学、医療人類学

・『原爆被爆者の暮らしとトラウマ:絡み合いを描きだす』(単著、春風社、2024)

・「螺旋状の因果性をもつトラウマ:原爆被爆者をめぐって」(『こころと文化』21(2)、2023)

・『祖父とあゆむヒロシマ:今は言える、自由に。』(単著、風媒社、2019)

聞 豪 (WEN Hao) 特任助教

Ph.D. 映画都市論・映像流通研究

・“Global City by the Cinematic Sea: The Fishing Nut’s Diary Series and the Imaginaries of Tokyo’s Waterfront Urbanism from the mid-1980s to mid-1990s” *Screen*, 67. 1 (2026)

・“Tokyo Sanitization: Wim Wenders’ Perfect Days and the Discourse of Public Cleanliness in Japan.” *Mediapolis: A Journal of Cities and Culture*, 9. 1 (2024)

岡 知奈実 (OKA Chinami) 助教

D.Phil. (History) トランスナショナル・ヒストリー、日本近現代史

・“A Defeated Samurai of the Boshin Civil War and the Search for a New Universalism,” in Bremner, L., Dotulong, M., and Konishi S. eds., *Reopening the Opening of Japan: Transnational Approaches to Japan and the Wider World* (Brill, 2024), 300–323

・“Arai Osui and the Transnational Reimagination of Civilization in the Late Nineteenth-Century United States,” *The Historical Journal* 66 (2023), 101–121

・“The Hensachi: Its Dominant Role in University Rankings,” in Snowden, P. ed., *Handbook of Higher Education in Japan* (Amsterdam University Press, 2021), 133–142. Co-authored with Roger Goodman

担当授業: Introduction to Research Methods for Culture and History (IACS) など

現在、文学部・人文学研究科には、学部生、大学院生、研究生、交換留学生を含め、十数の国や地域から約300名の留学生が在籍し、それぞれの目的を持って日々の勉学に励んでいます。国籍や価値観、文化的背景が異なる多数の留学生が集まる国際的な環境で学ぶことは、留学生だけでなく、日本人学生にとっても大きな刺激となっています。

このほか、文学部・人文学研究家は世界各地の大学や研究機関と独自の協定を結び、国際シンポジウムの開催や短期プログラムなど多様な学術交流を活発に行っています。留学生が安心して勉学や研究に集中できるよう、今後も国際化推進室では様々なサポートを提供していく予定です。

文学部・人文学研究科には、国際化推進教員2名と国際化推進室長からなる「国際化推進室」があります。国際化推進室では、主に以下の活動を行っています。

- 在籍留学生の勉学、日常生活、就職のサポート
- 留学生の受入
- 文学部・人文学研究科に入学を希望する志願者への対応
- 留学や海外インターンシップを希望する日本人学生への支援
- 協定校との国際交流活動

Global Experience

国際交流

海外から学びにやってくる人、海外へ学びにゆく人。学問共同体は国境を越えて広がる。

海外との交流

現在名古屋大学では海外の61ヵ国の大学、研究所等と学生国際交流を行っています。受け入れ留学生については令和6年度は全学で2,543名でした。文学部・研究科では令和7年度に下表に記したように297名を受け入れています。



名古屋大学文学部・人文学研究科の過去10年間の留学生数（各年5月1日現在）

留学生数	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 31年度	令和 2年度	令和 3年度	令和 4年度	令和 5年度	令和 6年度	令和 7年度
	138	150	336	269	297	223	319	320	290	297

留学のすすめ

名古屋大学の学生が利用できる留学制度の代表的なものとして、交換留学(1学期以上1年未満の留学)プログラムがあります。次のページにあるのは、本学が全学間学術交流協定、もしくは部局間学術交流協定で「授業料不徴収協定」を結んでいる大学一覧です。これらの大学へ交換留学する場合、派遣先の大学に追加で授業料を納める必要はありません。また、交換留学のほかには、休暇を利用して渡航する短期研修(2週間～1ヶ月程度)もあるため、自分の計画や興味にあった留学プログラムを選ぶことができます。

文学部・人文学研究科には国際化推進室があり、留学生のサポートのみならず、名大から海外への留学を目指す学生のサポートも行っています。また、本学の全学部・研究科の学生を対象としたサポートは、

グローバルエンゲージメントセンターの海外留学室が担っています。海外留学室では、名大生が利用できる留学プログラムやその制度についての情報を得たり、留学準備や帰国後も含めた留学経験のフルサポートを受けたりすることができます。交換留学をするためには、留学開始の1年前に学内選考を受ける必要があるため、早めに海外留学室に相談に行くことをお勧めします。

留学で得られるものは、語学力や多文化適応力や異文化理解力だけではなく、学生時代に海外で異言語・異文化に触れながら生活し、勉強した経験は、貴重な財産となります。是非、積極的に留学制度を利用してください。

協定校一覧はこちらをご覧ください https://www.nagoya-u.ac.jp/international/iech/courtesy_call/index.html



学部在学生・卒業生からのメッセージ

XI

先輩からのメッセージ



フランス語
フランス文学分野専門 3年(執筆当時)

上野 心優

卓球とフランス語

私は中学生の頃から卓球部に所属していて、大学でも卓球部に入りました。一番驚いたことは遠征の多さです。一年を通して全国のいろいろなところで試合があります。遠征を通して部活の仲間と仲良くなったり、全国に友人ができることが、卓球部に入って良かったと思う点です。

勉学に関しては、もともとフランスに興味があったので、一年時にフランス語フランス文学分野専門(以下仏文)を選択しました。仏文に所属している学生数は他の分野専門に比べて少ないですが、先輩方は皆とても優しく、先生方も丁寧に指導してくださるので、勉強や学校生活に関して不安なことがあった際はとても相談しやすいです。実際、私や私の同期は大学に入学するまでフランス語を学んだことがなかったのですが、先輩方や先生方のサポートのおかげで授業について

いくことができ、楽しくフランス語を学んでいます。

2024年の3月には、ストラスブール研修に参加しました。この研修は特定の授業を受講し、希望することで参加でき、ドイツとの国境付近にある、フランスのストラスブールという街に二週間ほど滞在します。この研修が初めての海外渡航であった私にとっては、何もかもが刺激的で、とても貴重な経験になりました。現地での授業はすべてフランス語で行われ、理解に苦しみましたが、共に研修に参加した仲間と協力しあって授業を受けることができました。この経験でさらにフランス語を学ぶ意欲が湧きました。

以上のように、私の大学生活は卓球とフランス語が主になっていますが、趣味で裁縫や編み物も楽しんでいます。残り半分となってしまった私の残りの大学生活も、好きなことをたくさん学んで楽しもうと思います。

新たな視点

名古屋大学文学部を一言で表すなら、「つねに新しい視点を得られる場所」だと思います。同じ世界に生きていても、同じ視点で世界を見ているとは限りません。ここでは国際的な友人との交流することで異なる価値観に触れ、海外の教授による特別講義や英語プログラムの授業を通じて、言語力を高めるだけでなく、異なる文化圏での学びを体験し、世界をより多面的に捉える力を育むことができます。

私は現在心理学分野専門に所属していますが、文学部では心理学に限らず、言語学、文学、哲学、歴史学、社会学、地理学など、多様なアプローチで人間について学べます。文学作品に描かれた人間の心理を分析することで、心理学の理論を新たな角度から理解することや、考古学の視点から文化発展を考察することで、過去の文化や社会構造が人間の心に与える影響をよ

り深く理解することができます。こうして自由に多分野を学ぶことで、自分の専門分野への理解を深めることが、名古屋大学文学部ならではの魅力です。

また、留学や国際交流に興味がある高校生の皆さんにとって、海外大学の教授による講義や、留学生とディスカッションができる授業は大きな刺激になると思います。私は異なる言語や文化を背景に持つ人々と話し、異文化の視点から日常生活を見つめ直すことで、今まで見てきた世界が新たに広がっていくことを日々実感しています。

名古屋大学文学部は文学を学ぶ場にとどまらず、多角的な学問の視点から人間を探究できる場所です。言語、文化、学問を融合しながら新しい知見を得られる環境で、世界観を広げ、思考を深める刺激的な日々を、ぜひ皆さんも体験してみてください。

「人文学」を学ぶ

「文学部」と聞くと、多くの人は小説や詩といった狭義の文学を連想するかもしれません。しかし、名大文学部が対象とするのは、人間の営み全般を広く捉える「人文学」です。そして入学段階で専攻を確定する必要がなく、学びながら関心を深めていくことができるため、すでに明確な関心領域を持っている人にとってはもちろん、学びのなかで自分の興味を見出したと考えている人にも適した学部だといえます。

1年次には、「人文学入門」というオムニバス形式の授業があり、各専攻の教員がそれぞれの専門分野について講義を行い、分野を横断しながら関心を広げる契機となります。私自身は、当初英語に関心を持って入学しましたが、この授業を通じて日本語学や言語学といった隣接領域にも強い興味を抱くようになりました。最終的に英語学を専攻しましたが、カリキュ

ラム上、他専攻の授業も履修する必要があります。他専攻の授業では、まったく別のテーマだと思っていた内容に、自専攻に共通する問題意識や理論的枠組みを見出すことがあります。

また、名大文学部では教員免許や学芸員資格の取得も可能です。専門科目の履修と並行して、資格取得に必要な単位を計画的に修得することで、卒業要件を満たしながら次のキャリアへの準備ができます。私は卒業後、愛知県内の高校で英語教諭として勤務しています。自専攻の英語学をはじめに、他専攻で得た知識や視点も踏まえ、論理的思考力や人間理解の深化を日々の授業に反映させていきたいです。

みなさんも、名古屋大学文学部で学んでみませんか？

大学院在学生・修了生からのメッセージ

XI

先輩からのメッセージ



日本文学分野専門
博士前期課程 2年(執筆当時)

清水 翔瑛

戯れせむとや

人文学研究科。Graduate School of Humanities。因果な名前である。

ようこそ、ここはHumanityを学ぶところです。複数形のSは、まあ、置いとこう。私は、日本の近現代文学を研究している。小説を読むことは特に、その人間性なるものを見定めることだ。人間の醜悪さと愚劣さを見据えた先でなお、生を肯定すること。

ふーん。言うは易し。しかし、だからこそ私には、テキストをただ徹底的に読めば、研究室に通い詰めれば、研究が成り立つなどとは到底思えない。恋愛経験なくして恋愛小説が、肉体労働の重苦しさや愉しみを知らずしてプロレタリア文学が、酒を飲むことの快楽と二日酔いの倦怠を味わわずして無頼派の小説が読めるのか…。などというのは極論だが、人間とやらについて語ろうとするならば、行儀よ

く図書館に坐して、書を繙いていればよいというはずはない。

むろん、研究は精読に始まり、精読に終わる。その過程で、自分というひとりの人間を知る。テキストを介した自分との対話。読みの癖。私は何を愛し嫌悪し欲望しているのか。そして同時に生起する、書き手という人間との出会い。

そのようにして本を読むこと。読み続けること。同時にひとと交わり、山に海に揉まれ、音楽やスポーツの熱狂に身を投じ、様々な土地に足を運ぶこと。そしてまた本を読むこと。遊びのために義務をこなすのでも、知見を広げるために遊ぶのでもなく、その行為ひとつひとつを享楽する。日々の生活が、Humanitiesの研究であり、遊びである。

ようこそ、ここは遊ぶところです。

史料の一字一句もゆるがせにしない

私は、日本統治時代の台湾における紳士階層について研究を行っています。紳士階層は様々な問題を抱えつつも、台湾の基層社会で重要な役割を果たしてきました。こうした紳士階層について新しい視角や史料を用いて再検討し、日本統治時代の台湾史をより深く・長い視点から描き直すことが私の目標です。

私はもともと台湾で民族学博士の学位を取得しましたが、歴史学の立場から研究を行う必要性を痛感し、名古屋大学に入学しました。所属する東洋史学研究室では、専門分野の先生からだけでなく、他分野の先生からの指導も受けることができ、視野を広げることができます。また研究室には長い歴史があり、これまで魏晉南北朝史や明清時代史研究といった分野で学界を牽引する研究者を輩出してきま

した。こうして培われてきた史料を一字一句もゆるがせにせず読み解く授業を通じて、歴史学の着実な研究手法を身に着けることができます。さらに、研究室では多くの蔵書に囲まれながら、院生同士が互いに学びあったり、研究室の会誌に投稿すると先輩たちから丁寧なアドバイスをいただいたり、研究室のある日本の大学のメリットを享受することもできます。

この他、特筆したいのは、名古屋大学では博士課程学生への支援がたいへん充実していることです。私はメイク・ニュー・スタンダード次世代研究事業という支援事業に採択され、おかげで研究に専念できるようになったばかりでなく、より研究を社会に役立てたいと考えられるようになりました。

思い切って名古屋大学に入学して正解でした！

中京圏で研究すること

私は日本の近現代史、特に日本海軍がどのように青少年を勧誘し志願兵にしていたのかについて大学・大学院と研究してきました。その際、防衛省が所蔵している海軍中央の史料を使用するのみではなく、全国各地にある「兵事資料」と呼ばれる史料などを集めて研究を進めました。当初は海軍についての史料がまとまって残っている地域がないことから苦労しましたが、複数の地域の史料を組み合わせることで全体像を描いていく方法で博士論文を執筆し、著書として出版することができました。

こうした私の研究の背景には、名古屋大学日本史学研究室が重視していたフィールドワークを用いた授業がありました。特に当時の天皇陵に現地踏査する授業や研究室旅行は、私が研究者として各地に調査に行く前提として貴重な経験となりました。

たしかに、大学の数や研究拠点の数は関東圏や関西圏の方が多くいます。ただ、名古屋はそのどちらにも行きやすいため、東西両方の学会に顔を出し、広い人脈をつくることができます。また、近現代史の場合は名古屋でも研究会を持っているため、関東や関西などで知り合った研究者に名古屋で報告してもらうことで、より深い関係性を築くことができました。この研究会を通じた人脈は私の現在の研究者としてのキャリアを考える上でも重要な役割を担っています。

私自身の現在の研究があるのも、名古屋大学と中京圏の研究環境のおかげだと思っています。今は教員として、中京圏の研究にかかわれていることを嬉しく思います。一緒に中京圏で研究をしませんか？



愛知県教員
英語学分野専門 2024年度卒業

後藤 駿介



岐阜聖徳学園大学人文学部
専任講師
日本史学分野専門 博士後期課程
2020年単位取得満期退学(2021年博士号取得)
文学部2015年卒業

木村 美幸

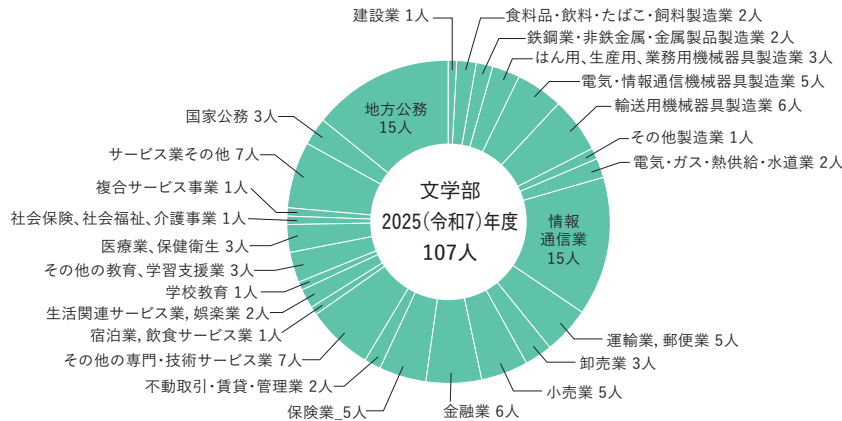
社会へ

社会のさまざまな分野で活躍する卒業生たちの姿を追ってみよう。

文学部

就職状況

名古屋大学文学部にはさまざまな学問分野がありますが、どの分野も共通して、人間の感性と知性についての深い理解を身につけることをねらいとしています。文学部の卒業生たちは、論理的な思考力を持ち、人間の意識と行動についての総合的理解を身につけた有為な人材として、民間企業、公務員などのさまざまな分野で活躍しています。最近では大学院へ進学し、2年間の博士前期課程を修了した後に就職するケースも増えています。



2025(令和7)年度卒業生の主な就職先

■民間企業等

株式会社BREXA Technology
株式会社IIGグローバルソリューションズ
株式会社KyoMi
株式会社NTTデータ東海
株式会社NTTドコモ
株式会社QUICK
株式会社アーテック
株式会社アイシン
株式会社アピッツ・ファンカルチャーパートナー
株式会社イマオコーポレーション
株式会社インソース
株式会社ウィル
株式会社エース
株式会社エスネットワークス
株式会社システムサポート
株式会社スタッフサービス・ホールディングス
株式会社スプリックス
株式会社ゼネラルパートナーズ
株式会社デンソー
株式会社トーハン・コンピュータ・サービス

株式会社トヨタエンタプライズ
株式会社ニトリホールディングス
株式会社バローホールディングス
株式会社ファブリカコミュニケーションズ
株式会社フォーム
株式会社ベリサーブ
株式会社ミリアルリゾートホテルズ
株式会社ゆうちょ銀行
株式会社湖池屋
株式会社構造計画研究所ホールディングス
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社十六フィナンシャルグループ
株式会社大垣共立銀行
株式会社日本総合研究所
株式会社日立ソリューションズ
株式会社八十二銀行
株式会社豊田自動織機
株式会社名古屋銀行
株式会社野村総合研究所
株式会社有隣堂

ALSOK株式会社
arma bianca
CAPS
JFEスチール株式会社
MONA MACHO
Sky株式会社
オクマ株式会社
クラブツーリズム株式会社
ゲンキー株式会社
セイハネットワーク株式会社
デロイト・マツコンサルティング合同会社
デロイト・マツファイナンシャルアドバイザー合同会社
トヨタ自動車株式会社
ブラザー工業株式会社
レシップ株式会社
レバレッジーズ株式会社
愛知県厚生農業協同組合連合会(JA愛知厚生連)
学校法人三幸学園
吉田直土木株式会社
月島食品工業株式会社

三井倉庫ホールディングス株式会社
三菱重工業株式会社
静岡ガス株式会社
大学生協事業連合 東海地区
大陸貿易株式会社
中日本高速道路株式会社(NEXCO中日本)
中部国際空港株式会社
中部電力パワーグリッド株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
東芝ライフスタイル株式会社
日新電子工業株式会社
日本ガイン株式会社
日本貨物鉄道株式会社(JR貨物)
日本製鉄株式会社
日本赤十字社 愛知県支部
日本電気株式会社(NEC)
日本郵政株式会社
名古屋鉄道株式会社
名村情報システム株式会社
明治安田生命保険相互会社

■公務員

愛知県庁
春日井市役所
岐阜市役所
厚生労働省

高山市役所
千葉県庁
津市役所
富山県庁

法務省出入国在留管理庁 名古屋出入国在留管理局
豊橋市役所
豊田市役所
名古屋国税局

名古屋市役所

取得できる資格

学士の学位を得ることに加えて、必要な単位をとれば、つぎのような免許状を取得することができます。

教員免許状

中学校教諭1種免許状

- 国語
- 社会
- 英語

高等学校教諭1種免許状

- 国語
- 地理歴史
- 公民
- 英語

学芸員

学士の学位を有する者で、大学において文部科学省令で定める博物館に関する科目の単位を修得することにより、学芸員となる資格を得ることができます(博物館法第5条)。

教員免許状とは異なり、免許状のようなものは交付されませんが、博物館などに就職する際の資格要件となる「学芸員資格」を有することを証明するための「単位取得証明書」が発行されます。

大学院

2025(令和7)年度修了生の主な就職先

人文学研究科博士(前期課程)

■民間企業等

株式会社CBCテレビ
株式会社アイヴィス
株式会社インテック
株式会社エイエイエスティ
株式会社コバック
株式会社システムリサーチ
株式会社デンソー
株式会社トーマコーポレーション
株式会社トライグループ
株式会社プライムブレインズ
株式会社みらいホールディングス
株式会社ヨシタケ
株式会社岩手日報社
株式会社高津製作所
株式会社新東通信
株式会社中日新聞社
株式会社東芝
株式会社豊田自動織機
Green Carbon株式会社
LAマイスター株式会社
アビ株式会社
きぬ川スパホテル 三日月

■公務員

金沢地方法務局
名古屋市博物館

ザイマックス東海
ソフトバンク株式会社
ニッタ株式会社
パーソルビジネスプロセスデザイン株式会社
リックソフト株式会社
ローランド株式会社
学校法人栗本学園 名古屋商科大学
国立大学法人東海国立大学機構
三信電気株式会社
松田産業株式会社
双日株式会社
大樹生命保険株式会社
中部電力パワーグリッド株式会社
朝日インテック株式会社
東京冷機工業株式会社
東邦ガス株式会社
東洋エンジニアリング株式会社
日本放送協会(NHK)
日立ソリューションズ
矢吹海運株式会社
三井住友銀行(中国)有限公司

■教員

愛知県教育委員会
長野県教育委員会

取得できる資格

修士の学位を得ることに加えて、必要な単位をとれば、つぎのような免許状を取得することができます。

教員免許状

中学校教諭専修免許状

- 国語
- 社会
- 英語

高等学校教諭専修免許状

- 国語
- 地理歴史
- 公民
- 英語

入学と勉強のために

文学部 入学試験について

文学部の個別学力検査等は次のとおりです。
募集人員は、推薦入試15名、前期日程110名です。

災害や感染症の流行等により、試験日程や選抜内容等に変更が生じた場合は、当学部のホームページ上でお知らせしますので、最新の情報をこまめに確認するようにしてください。
○文学部ホームページ URL <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/>

■入試教科・科目

【推薦】 書類審査、小論文及び面接

【前期】

1. 国 語	(現代の国語・言語文化・論理国語・文学国語・古典探究)
2. 外国語	英語(「英語コミュニケーションⅠ」・「英語コミュニケーションⅡ」・「英語コミュニケーションⅢ」・「論理・表現Ⅰ」・「論理・表現Ⅱ」・「論理・表現Ⅲ」の6科目をあわせて出題。)
3. 地 歴	(地理総合・地理探究、歴史総合・日本史探究、歴史総合・世界史探求から1科目)
4. 数 学	(数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B・数学C)

■試験の日程

【推薦】 11月下旬頃

【前期】 2027年2月25日、26日

また、文学部では3年次編入学試験を実施しています。
募集人員は、10名です。

※各入学試験の詳細については、「入学者選抜要項」または「学生募集要項」でご確認ください。

■募集要項の入手方法

名古屋大学文学部ウェブサイトで確認してください。
<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/examination/examination-sub5/>

奨学金及び入学料・授業料免除

人物・学業ともに優れ、かつ健康であって、経済的理由により修学が困難であると認められる者には奨学金や授業料免除の制度があります。
また、入学前1年以内において、学資負担者が死亡、風水害等の災害を受けた場合などには、入学料免除の制度もあります。
奨学金のうち、文学部生が最も多く利用しているのは日本学生支援機構の奨学金(ただし、この奨学金は貸与されるもので、貸与終了後は返済の義務があります。)です。なお、そのほかにも地方自治体や民間団体による奨学金を受給している者も若干名います。

■2025(令和7)年度の授業料免除実施状況(文学部)

	在学 生数	春学期				秋学期			
		全額 免除	半額 免除	2/3 免除	1/3 免除	全額 免除	半額 免除	2/3 免除	1/3 免除
1年	132	27	1	1	1	28	0	1	1
2年	138	25	0	0	1	24	1	1	0
3年	141	18	0	1	0	19	0	0	0
4年	166	18	0	2	1	17	0	1	0
計	577	88	1	4	3	88	1	3	1

在学数は、2025(令和7)年5月1日現在

■日本学生支援機構奨学金の貸与状況

2026(令和8)年3月現在

	在学生数	第一種奨学生	第二種奨学生
1年	128	14	4
2年	138	15(1)	4(1)
3年	142	12	5
4年	168	10(1)	7(1)

()内は併用貸与
在学数は、2026(令和8)年3月1日現在

人文学研究科 入学試験について

人文学研究科の入学試験は次のとおりです。
募集人員は、博士前期課程104名、博士後期課程61名です。

災害や感染症の流行等により、試験日程や選抜内容等に変更が生じた場合は、当研究科のホームページ上でお知らせしますので、最新の情報をこまめに確認するようにしてください。
○人文学研究科ホームページ URL <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/>

■選抜方法

入学者の選抜は、出願書類審査及び学力試験により行います。

一 般 入 試	入試種別	入試日程	試験科目
	博士前期課程第1期	9月上旬頃	外国語試験※
			専門試験
			口述試験
	博士前期課程第2期	2月上旬頃	外国語試験※
			専門試験
			口述試験
	博士後期課程(4月入学)		口述試験
	博士後期課程(10月入学)	7月上旬～中旬頃	口述試験

※外部試験を外国語試験の成績とする

■募集要項の入手方法

名古屋大学人文学研究科ウェブサイトからダウンロードしてください。
<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/examination/examination-sub4/>

奨学金及び入学料・授業料免除

詳しくは48ページの説明を参照してください。
奨学金については、人文学研究科では、日本学生支援機構の奨学金のほか、地方自治体や民間団体による奨学金を受給している者がそれぞれ若干名います。奨学金の支給額等については、本学ホームページ「各種免除制度・奨学支援」をご確認ください。

■2025(令和7)年度の授業料免除実施状況(人文学研究科)

	在学生数	春学期		秋学期	
		全額免除	半額免除	全額免除	半額免除
前期課程1年	86	20(14)	19(17)	22(16)	19(17)
前期課程2年	117	32(26)	19(15)	29(22)	24(19)
後期課程1年	56	16(8)	9(6)	17(8)	8(5)
後期課程2年	50	11(4)	15(12)	10(5)	16(12)
後期課程3年	107	10(8)	7(5)	10(6)	7(5)

()内は留学生
在学数は、2025(令和7)年5月1日現在

■日本学生支援機構奨学金の貸与状況

2026(令和8)年3月現在

	在学生数	第一種奨学生	第二種奨学生
前期課程1年	86	9(1)	2(1)
前期課程2年	117	8(2)	2(2)
後期課程1年	50	5	0
後期課程2年	55	2	0
後期課程3年	103	2(1)	1(1)

()内は併用貸与
在学数は、2026(令和8)年3月1日現在